

「松本先生から頂いた私の第三の人生」

大阪府 46歳)

2002年10月1日

★ まず始めに書き記したいことがあります。世界中の全ての医者と、リウマチ患者さんは、リウマチは絶対に治らないと、思い込んでいますが、実は、「リウマチは、誰が何と言おうとも、絶対に、必ず治る病気である。」事実を、全世界の人々に伝えたいのです。その為に、ここにその素晴らしい証拠を見せてあげたいのです。これが可能になったのは、私だけに許された特別な治療法を見出したのではなくて、誰も知らなかった、人類の長い歴史の中に隠されていた、治る道筋（言い換えれば、理論）を、私が始めて明らかにしたからです。つまり私に言わせれば、ノーベル賞級の新しい発見なのです。勿論同時に、この正しい理論に基づいて、新しい治療法をも発見したのです。この手記は、まさに、リウマチ完治の理論と方法の正しさを、実証するものです。特に、この方の手記は、一冊の書物にして、巷間に知らせしめる価値がある程の優れた手記ですから、コメントも全力を尽くして、書き上げたつもりです。

さて、この方も、赤ちゃんの頃からアトピーのみならず、アレルギー性鼻炎もあったことを確認しておきたいのです。しかしながらこの方は幸せなことに、アトピーなどの治療のために病院に行くこともなく放置されていたために、最後は私のいう「自然後天的免疫寛容」を起こして治ってしまっていたのです。しかし妊娠により新しい異物と出会い、リウマチを起こしたのです。ところが最近のリウマチの多くは、鼻炎やアトピーをステロイドや抗アレルギー剤で抑制したために、抗体のいわゆる逆クラススイッチが行われます。その結果、アレルギーの抗体である IgE 抗体が作られない分、リウマチの抗体である IgG 抗体が大量に作られるためにリウマチが生じるのだ、ということも強調しておきたいのです。手記を読む前に、必ず私のリウマチの理論を、5回以上は読んでください。とりわけ IgG 抗体から IgE 抗体へのクラススイッチの意味を理解して下さい。★

松本医院を初めて訪ねたのは、21世紀の幕開けである2001年の1月5日でした。奇しくも、それは私の第三の人生の幕開けでもありました。リウマチの発病以来十数年、開かれることはないと思いつめ、さらには自らその幕を閉じようとさえ思った人生の、第三の重い重い扉を松本先生に開けて頂いたのです。★リウマチが不治の病でないにもかかわらず、治らないと思いつんで、自ら命を絶った人がいます。しかしリウマチが不治の病でないことを知っているのは、世界中の医者の中で、残念ながらただ一人私だけなのです。実は、他にも知っている人がいます。私の治療を受けて治った患者さん達です。実はリウマチは、余計な治療をされなければ、風邪よりも治療するのにたやすい病気なのです。というのは、まずリウマチで死ぬことは無いのですが、風邪が嵩じて肺炎で亡くなることはよく経験する事です。たとえリウマチで亡くなられたとしても、それはリウマチが原因であるわけは

ないのです。現代医学の長期にわたる免疫抑制剤による副作用のために、多くは感染症で亡くなります。★

生まれた時が人生の始まりで、結婚は第二の人生などと言われますが、私は今、松本先生に開けて頂いた第三の人生を謳歌しています。昨年秋よりパソコンを習い始め、箸を使うのにも支障を来していたこの指でパソコンのキーボードを打ち、この手記を書いています。着物の着付け教室にも通い、ボランティア活動であちこちに出かけ、主人と車で軽井沢に旅行も出来ました。

リウマチは難病・不治の病と言われ、ありとあらゆるものに救いを求めた私ですが、今心から素直に、大いなるもの（神様）に対して、松本先生に出会わせて頂いた事、そして私を支え続けてくれた主人がいてくれる事を、深く感謝しております。★難病といわれるリウマチの患者さんに対して、所謂宗教集団から信仰すれば治ると誘惑され、大金をまきあげられる話もよく聞きます。宗教で不治の病が治るとすれば医学はいらないことになりますが、リウマチやアレルギーに関しては、現代の医学は自分を主張できるほど宗教より勝っているとは言えません。この患者さんが私との出会いがあったのは、何も神様のおかげではありません。彼女が現代医学を拒絶し、その分心の葛藤を彼女が引き受け、さらに絶対に治る方法を模索され続けた暁に、やっと私のインターネットの出会いがあったのです。それに加えて、私の理論を、完全に理解できる高い知性があったからです。インターネットには、無数の情報が飛び交っています。その中から私の理論を選び出し理解するという事は、実は至難の業なのです。世界中の全ての医者がリウマチは治らないと断言している時に、インターネットを読むだけで、私の治療を受ける理解力と決断力を発揮できた彼女に、乾杯です。複雑な現代社会の営みが専門分化され、莫大な情報が渦巻いている時代に、正しい情報を選ぶことは、素人にとっては元来無理な話なのです。選択の責任を一般大衆に負わせるのは、赤ん坊に投票権を与えるようなものです。従って間違った情報を出す側に、責任を負わせるべきなのです。つまり間違った情報を与えて受け取った側に不利益を与えたときには、罰せられるという法律があれば、この問題は簡単に解決できるはずです。しかしいつまで経ってもこのような法律ができないのはなぜでしょうか？考えてください。もちろんこのような法律ができれば、私は一日の診察だけで、文字通り忙殺されるでしょう。★

（1）発病

それはある日突然、何の前触れもなく起こりました。平成元年初夏、33歳だった私は第三子を身ごもっており、妊娠三ヶ月でした。まさに突然、左腕に激痛が襲ったのです。何の前触れも無くと言いましたが強いて言うなら、上の二人の娘の時より悪阻が大変軽かったことでしょうか。免疫システムが胎児を異物と認識したために起こる一つの症状を、悪阻とするなら、その悪阻が軽かったということは、悪阻とは異なる症状で異物を吐き出そうとしたと考えられるかもしれません。★胎児は、

母体にとっては100%異物です。全ての人間の細胞には、人によってそれぞれ異なるMHCという独自の名札がついています。胎児の名札と母親の名札とは、全く異なっています。特に女性である母親と男の胎児の違いは、女の胎児との違いよりも、はるかに大きいのです。悪阻（つわり）というのは、胎児が最初に作り出した異物が母体の血流を通じて脳が感知し、その異物は消化管を通じて侵入してきたものと誤解し、それを嘔吐によって排泄しようとする行為であると考えます。このような過剰反応は、人体の働きのひとつとしてあちこちで見られます。例えばリウマチで、異物を殺すのが最後はアトピーで殺さなくても排泄できるとすれば、初めから殺すなどというような過剰反応をしなくてもいいはずですが、さらにアトピーで排除する必要も無いということが判断されて、自然後天的免疫寛容によって排除することを、結局最期には止めてしまうのであれば、最初から排除するという過剰反応をする必要もないはずですが、そこまで人体は、進化していないのです。（ちょうどこれは、人間が始めて出会う人に対しては、過緊張して構えるのと似ています。これも一種の過剰反応です。）これらも全て人体に必要な過剰反応と言えますが、その異物に殺されると困るから、まずは、相手を殺そうとして過剰反応をして様子を見るのです。妊娠4ヶ月ぐらいになると胎盤が完成され、胎盤はステロイドホルモンや女性ホルモンを産生し始めると同時に、胎盤の細胞は、赤ちゃんの名札であるMHC分子を作らないようにしたりして、アレルギーを抑え始めます。これにより胎児のみならず母体も、アレルギー物質から守られるようになるのです。この方の場合も、痛みは受精してから胎盤ができるまでの間に生じて、その後のリウマチは胎盤から放出される内因性のステロイド作用などにより、抑制されたのです。★私の第三子の妊娠の場合は、関節からの吐き出し、つまりリウマチだったのでしょか。その痛みは、夜は眠れず時として息も出来ない程でしたが、二・三日苦しんだ後は嘘のように消えてしまいました。ところがまた数日すると、今度は右足、その次は右手、腰から左股関節というように一ヶ月ほど続きました。★リウマチは慢性疾患だと言われますが、実は、急性の戦いの繰り返しに過ぎないのです。というのは、アレルゲンが入るたびに、免疫が異物と認識すると同時に、急速に排除しようとする闘いに過ぎず、その意味では正しくは、リウマチは急性炎症性慢性疾患と言えます。従って、異物と認識することを急に止めれば、治る病気と言えます。私の発見した理論の素晴らしい所は、リウマチの痛みとして異物を排除する免疫の働きが、私の治療により、痒みとして異物を排除する働きであるアトピーに変わり、最後は異物と認識することさえも急に止めてしまう「アトピーの自然後天的免疫寛容」が、誰でも生ずるという点にあります。★驚いて病院に駆け込むと、産婦人科から内科、整形外科と回されて、検査の結果リウマチだと宣告されました。目の前が真っ暗になり、人目もはばからず流れてくる涙は、病院の待合室の椅子から立ち上がる力をも無くしていました。★私がこのような手記を書いてもらう理由の一つは、このような無用な落ち込みを避けさせてあげたいという思いがあるからです。日本にはおよそ80万人～100万人の悲しい運命を背負ったと思われるリウマチ患者さんがいますが、実は80万人の癌になりにくい、この世で最も幸せな運命を享受している人が存在することを伝えたいのです。アトピーが病気でないのと同様に、リウマチは病気でないのです。いわば地球の環境汚染を誰よりも敏感に感じ取り、言葉ではなく自らの痛みでもって、現代文明を告発している肉体の正義の先駆者なので

す。このような素晴らしい人達の集団を病人扱いした上に、さらに永遠に治らない病気にしたあげくに、その人達の人生の全てを地獄に引き落とすのは、一体どんな権利があって許されるのでしょうか？リウマチの患者さんが癌になりにくい理由は、リウマチの患者さんが、最初に異物であるリウマチ抗原を見つけ出すメカニズムと、癌抗原を異物としてを見つけ出すメカニズムは、同じものであるからです。つまり他の人が気がつかない異物を、真っ先に見つけ出し排除する才能が高いと言えるからです。事実、丸山ワクチンは、結核患者さんに癌が少ないという事実から発見されたのですが、結核の方は、常に結核菌と戦っているのです、常に異物を発見しようとする免疫が刺激され、否が応でも監視機構が高まっているので、癌細胞も見つけやすいということが分かり、結核菌から癌ワクチンを作ったのです。いわば、リウマチの人は、生まれつき「丸山ワクチン」を持っている人なのです。同様に、リウマチ患者さんの癌の罹患率は、必ず低いはずで、皮肉なことを付け加えさせてもらえば、仮にリウマチ患者さんが癌で亡くなられたとすれば（嬉しい事に、私は寡聞にして聞いたことがないのですが）、それはステロイドをはじめとする抗免疫抑制剤の為に免疫の力が低下し、癌抗原を見つけにくくなった結果生じたと考えられます。★

というのは、実家のすぐ近所で家族ぐるみで親しくしていたおじさんがリウマチを患い、痛い痛いと言いつつ長い間苦しんでいた姿を見ていたからです。入退院を繰り返し、何度か手術を受けたりしましたが寝たきり状態となり、つい最近亡くなられたと聞きました。★死因は、もちろんリウマチではありません。やはり得体の知れない感染症だと考えられます。とにかくステロイドというのは、窺い知れない魔法の杖であり、このような杖を、何故神は人間に与えたのでしょうか？答えは、ただひとつであります。それは、生死を別つ炎症時のみに用いるために、神様はとっておいてくれたのです。この致命的な炎症の中には、重症感染症やショック死をもたらすようなアレルギーも含まれます。ところが医者や看護師は、その違いをわきまもせず、日常茶飯事にステロイドを使い出したために神の怒りに触れ、副作用が大問題となってしまったのです。このような方も、ステロイドなどの免疫抑制剤を使う前に、私との出会いがあれば、このような運命に耐える必要がなかったでしょうに。残念です。★ご本人の辛さは見るさえ耐え難かったし、お世話されていたおばさん（奥さん）や家族の大変さも身近でつぶさに知っていました。あの恐ろしいリウマチに私が罹ってしまったのです。恐怖というより戦慄に苛まれながら、リウマチ関連の本を読み漁りました。それは皮肉にも、リウマチは現代医学では治らないのだということ、決定的に私に思い知らせる結果となり、絶望という奈落の底に突き落とされました。

しかしあの激痛の繰り返しの一ヵ月以後は、それ程の痛みに襲われることはなく、平成二年一月末に無事出産することが出来たのです。治療は、妊娠中でしたので飲み薬はもらわず湿布薬だけで、出産後も母乳を与えていたので飲みませんでした。

長女・次女と女の子ふたりの後に、主人の待ち望んだ男の子の誕生に大喜びしたのもつかの間、生まれてひと月もしないうちに息子は重症のアトピーになってしま

いました。（この息子も松本先生のお世話になり、とても元気にして頂いております。）★お母さんがアトピーのみならずリウマチも発症した方ですから、お母さんの遺伝子を多く引き継ぐ男の子は、必ずアトピーになるのは運命付けられているのです。★昼夜無く全く寝付かない息子を痛む手足で抱きかかえる日々は、生きる力を、私からさらに奪い取っていきました。主人がいなければ、私と息子はこの世にいなかったと思います。息子の一歳の誕生日を迎え（平成三年一月）母乳を止めましたので、再び病院に行き治療を受けることにしました。治らないとわかっている、病気の進行を何としても遅らせたかったのです。★授乳中にリウマチが悪化しない理由は、プロラクチンという黄体刺激ホルモンが高くなり、黄体が刺激され、卵巣の黄体から黄体ホルモンであるプロゲステロンが作り続けられます。これもステロイド作用を持っている為に、リウマチの免疫作用が部分的に抑制されていたのです。★

松本先生の理論を読ませて頂くと、一般の病院の治療を受けることは、病気の進行を遅らせるどころか病気を悪くするのであり、その上新たに幾つもの病気を作り出すのですが、悲しいかな、当時の私は何も知りませんでした。松本先生は、絶対ノーベル賞をもらって欲しいこんな凄い理論を、惜しげもなくインターネットで公開され、多くの人々に無償で提供して下さっています。これには本当に頭が下がります。松本先生の理論はまさに『革命的で、天動説を地動説に変えたコペルニクスの転回』です。しかし当時のコペルニクスが凄まじい迫害を受けたように、松本先生も大変なご苦労をされておられます。それは先駆者や天才の多くが偉大なるが故に辿る道程とはいえ、一日も早く、松本先生のこの素晴らしい真実の（正しい）理論が、地動説のように全ての人々に当たり前になる日が来ますことを、願わずにはおれません。★私としては病気を治すことを生業としている一介の開業医に過ぎない訳で、私の責任はただ一つ、看板に示されているように病気を治すことだけです。病気を治すためにお金をもらっているわけですから、これほど当たり前なことはいないので、褒められる筋合いはありません。日本の社会に欠けている最も大きな根本は、責任を果たすということです。全ての分野で、取ったお金の分だけ責任を果たせば、全ての問題は解決できます。特にお金を取る側は、常に知的にも制度的にも強い立場にいるからこそお金をもらえるわけですが、その見返り分を取られる側に返していない為に、全ての問題が生じるのです。病気を治せないのに、何故お金を取られるのでしょうか？車の修理ができていないのに、お金を払う人がいるのでしょうか。しかも車は簡単に取り替えることができますが、人間の体はかけがえのないものですから、もっと丁重に取り扱われてしかるべきものです。にもかかわらず、病気を作ってもお金がもらえる医療システムは、どうして生き続けるのでしょうか？考えてください。★

リウマチを宣告された、自宅近くの市民病院の整形外科で診てもらい、何種類かの飲み薬をもらいました。その中にピンクの小粒の錠剤★このピンクの小粒は、勿論ステロイドです。★があり、医師は「これは頓服で、痛みが酷い時に飲むように」と言いました。一度だけ飲んでみるととてもよく効きました。でも息子のアトピーのお陰でステロイドの怖さを聞きかじっていた私は、その効き目のよさが逆に疑念

を抱かせ恐ろしくなって、それ以後は飲みませんでした。しばらく薬を飲んでもはかばかしくなかったのので、何回目かの診察の時「金の注射をしてみましよう。これが効く人もありますから。」と言われ二・三回したでしょうか。★シオゾールという金の筋肉注射です。金は本来、金庫にしまったりこっそり隠しておけば財産価値があるでしょうが、体に入れても体は金の価値は残念ながらわかってくれません。ただ異物と認識し、排除しようとするだけです。もともとリウマチは、それまでにすでに大量の異物が関節に溜まっているのを認識し、それをアレルギーと認め、排除するために起こっている病気にもかかわらず、さらに強力な異物である金を注射するとは、正気の沙汰ではありません。このために副作用で腎不全を起こし、死んだ人もいます。当然なことです。ただ金であるシオゾールは、抗原性（いわば異物の強さ）が、体内に入り込んだ他のどんな化学物質よりも強いので、あらゆる免役の兵士たちを動員して、シオゾールを排除しようとするために、他の本来のリウマチのアレルギーが無視されてしまい、見掛けの痛みは楽になるのです。つまり一種の陽動作戦と言えます。さらに問題なのは、わざわざ大量に注入した金が、どのように処理されるかであり、その後副作用が生じるのであります。いうまでもなく、金療法も根本治療ではないわけですから、この治療法も間違っています。一言でいうと金療法は、痛いところがあればその痛みを楽にするために、さらに強い痛みを別の所に加えて安心しているようなものです。しかも自分の体に！★体に赤い湿疹が幾つも出来たので止めることになりました。医師に対して不信感が募りましたが放っておく勇気も無く、あちこちの病院を訪ねました。今にして思えば当然のことながらどこの病院も変わり無く、逆に、自分を追い詰めることになりました。遠方にあったリウマチ専門の病院に行ったことがありました。成る程、多くの患者さんが来ておられ、その患者さんの多くが見るだけで体のあちこちに障害のあることが分かる方ばかりでした。しかし待合室で交わされていた会話、そして医師の診察も、私のほんの少しの期待をも完全に打ち砕くものでしかなかったのです。私は、その患者さんたちに自分のこれからの姿を重ねあわせ、悲嘆のうちにその病院を後にしました。★このような無駄を省き医療費を削減するためにも、今私がやっているこのような完璧なインフォームドコンセント（納得診療）を、全ての病医院に義務付けるべきです。つまりこのインターネットの私のホームページを読んでいる方は、受診せずとも私がどのような考えでどのようにして病気を治しているかがわかるはずで、納得した方だけが受診されたいわけでは、ありません。現在厚労省は、一番大事な情報、つまりどのような治療をしているのかを、看板に出す事を許していません。その結果患者さんは、はしご酒ならず、はしご病院をやらざるを得ません。しかもある病院を受診するのは、多くの場合素人の人達の評判で決まります。その評判には、実は病気の治し方については一切根拠が含まれていません。スーパーに行くのとほとんど違いがありません。（スーパーに行く時は、値段が安く品質の良いものを売っているということを確認するはずで、）たとえばリウマチで、ステロイドを使いたくない患者さんが、前もってステロイドを使う病院を知っていれば、初めから行く必要がないわけです。さらにステロイドを使うとすれば、その病院はなぜステロイドを使うかを説明すべきです。さらに使う以上は、そのステロイドの副作用について、前もって十分に知らせるべきです。インターネットは、このような受診をしなくても、ただで情報を得る事ができるという点では、まさに

革命的と言えます。★何時しか病院には行かなくなり、代わりにこの頃から、クロレダの何とかエキスだのいいと聞いたものは何でも試してみました。漢方薬の先生の所へ行ったり、通販で漢方薬を取り寄せて飲んだりもしていました。★ほとんど全ての健康食品というのは、その効果のメカニズムやその病気の治し方については一切説明がありません。しかも私のように、自信を持ってリウマチを治すことができるかと豪語している健康食品は皆無です。残念です。★

一年ぐらい経って（平成四年）症状が悪化したので、やむなくまた自宅近くの市民病院に行きました。どこの病院に行っても同じだと解っていたので、家から一番近い所にしただけです。一年前の医師とは変わっていて、この病院に来られたばかりの若い先生でした。鎮痛剤と胃腸薬と湿布薬をもらっていました。その後抗リウマチ剤のリマチルとボルタレン座薬を使うようになりました。薬が変わったり量が増えても病状は良くなり、痛みに苦しみながらの寝たきり生活へ、つまりは絶望という奈落の底へ行き着く緩やかな坂道を、ゆっくりと着実に転がっているように思いました。

有名人が、自分が癌やエイズ、アルツハイマー病であることを公表することがありますが、私は今こうして元気にして頂くまで、決して人に病名を言いませんでした。言えなかったのです。リウマチ=あのおじさんの姿であり、それは私にとって恐怖と絶望以外の何ものでもありません。病名を言うこと（自覚し認めること）さえ恐ろしいのでした。更にはリウマチですぐ死ぬことはないということが、かえって私を苦しめました。この強い痛みと倦怠感が延々と続くのか、しかも体の障害が進行して人の世話にならなければ生活出来なくなり、いずれは寝たきりになる、しかし意識ははっきりしていて痛みとわが身の惨めさに苛まれても、それでも生きているのかと思うと堪らなくなるのです。病状（身体）の悪化のスピードを遥かに超える高速で、精神（心）の崩壊が起っていきました。私は、魂の抛り所・魂の救いを求めてさまよいました。この頃もし、かのオーム真理教の誘いがあったなら、私は確実にその毒牙にかかっていたことでしょう。★彼女の気持ちは、全ての感受性と知性をもっている人には共通している真実の吐露だと思えます。実は、私は医者として病気を治しているだけで、特別なことをしているとは感じていません。ただこのような心の叫びを聞くと、本当に素晴らしいことを毎日やっているのだと、改めて再確認する気になります。体の病はもとより、心の病で悩んでおられるリウマチの患者さんが世界中におられることを思うと、私の理論と実践が、世界中にいち早く認められることを願わずにはおれません。その間、人の弱みにつけ込んで、お金を巻き上げる宗教団体が世界中にはびこり続けるのも、嘆かわしい事です。宗教で病気が治るならば、医者は必要でなくなるでしょうに。敢えて付け加えさせてもらえば、この手記からリウマチが治ることを知ってもらっただけで、「心のリウマチ」が治ってしまうという、無料の奉仕をやっているのではないかと、大きな期待を心密かに持っています。★

平成11年四月末、右手首の滑膜除去の手術を受けました。両手首がパンパンに腫れ上がり、日常生活に大きな支障が出てきていたのです。手術後は、腫れもひい

て大分楽になりましたが、半年もすると前より腫れが酷くなり機能障害も進んでしまいました。★このような無駄な滑膜除去術も頻回に行われていますが、医療費を高騰させる一因となるだけでなく、私の治療法でリウマチが全て元の状態に戻るのに、死ぬまで滑膜欠如人間のままに過ごさねばならないのは、残念です。それは、心のトラウマとして何時までも残るでしょうから。★痛む箇所が増え続けることは勿論辛いことですが、それ以上に、どう表現したらいいのか分からない全身の倦怠感（だるさ・しんどさ）も耐え難く感じられました。★リウマチは、膠原病のもっとも治りやすい関節の病気であるだけだと考えている人が多いのですが、実は、結合組織は体の全ての臓器に張り巡らされているので、同時に一過性に他の膠原病が生じている可能性があります。ただ関節は成人では全部で200個余りあり、かつ、関節滑膜は大部分が結合組織で作られているので、そこに異物が結合しやすいので、関節にリウマチが起こる可能性が、他の臓器に比べてはるかに高いだけなのです。この意味では、リウマチは、あくまでも内科の病気であって、整形外科の病気ではないのです。従って他の膠原病になっても、必ず関節の痛みが伴うのです。つまり慢性関節リウマチに加えて、別の臓器の膠原病が並存していると考えられます。さらに痛みが増えれば増えるほど、免疫系は仕事を増やし、その分正常人よりも余計なエネルギーを使い、余計な蛋白を作り、余計な炎症を毎日起こし、体を傷つけるのを続けるわけですから、全身の倦怠感が出るのも当然なのです。何れにしろリウマチは全身の病気なのです。従ってリウマチは全身科？で診るべきなのです。実は、本当に必要な正しい科は、「リウマチを治せる科」だけなのです。ハハハハ！★整形外科である医師には、そうした全身のだるさなどあまり意に介されない風でしたが、痛みや機能障害を訴えた箇所のレントゲンはよく撮ってくれました。そのレントゲン写真を見ながら言われた「破壊が随分進んでいるね。ああ、こっちもだね。手でも足でもどこでも手術したげるよ。」との言葉には、背筋がぞっとしたものです。★手術は整形外科医の仕事を増やし、人間を人工関節ロボットにするだけです。人間を生命体から死体へと徐々に変えていくだけです。実は、何もしないで痛みを我慢し続ければ、いずれは炎症を起こした関節は固まり、多少の機能障害は生じますが、骨粗しょう症もたいして進行する事もなく、勿論リウマチで死ぬ事は決してないのです。しかも手術をしても、痛み止めや、抗リウマチ薬やステロイドを飲み続けるわけですから、益々手術の意味がないわけです。その上最後の最後は、薬の副作用でわけのわからない死に方をしてしまうのが落ちです。実際現代医療を拒否し、10年以上も自然に放置したリウマチの患者さんが来られることがあります。徐々に変形も改善していく上に、残っているリウマチ抗体も炎症もなくなって行きます。個人差は色々ありますが。しかし、いつまでも強い影響を残すのは、ステロイドの注射であり、ステロイドの内服薬であります。くたばれ！ステロイド！★

平成11年の夏、かれこれ七年間診て頂いたその医師が遠方の病院に移って行かれると、どういう廻り合わせだったのか数ヶ月でコロコロと医師が変わって行きました。ある医師は、私ではなく分厚いカルテを一生懸命見た後「同じ薬を出しておきますよ。」とだけ言われました。別の医師は、「僕、よくわからないんです。どんな具合ですか？大変だと思いますが、負けずに頑張ってくださいね。」なんと返答

したらよいのか困ってしまいました。★リウマチを治してあげると保障してあげない限り、また実際に治してあげない限り、医者がどんなに同情し優しい言葉をかけても、患者にとっては、どんな素敵な言葉も治らないという言葉とまったく変わりません。私が初診で出会うすべての患者さんに、「あなたのリウマチは必ず治してあげる。」と言うだけで、リウマチは半分以上治っているのです。この言葉だけで、「心のリウマチ」は、完治しているからです。残す所は、「肉体のリウマチ」だけです。しかしながら、以下に述べる人達は、残念ながら、リウマチが治るのに時間がかかります。私に出会うまでに、何回もステロイド注射をされていたり、ステロイド内服剤を何千mgあるいは一万mg以上を飲み続けてきた人、それから種々の手術をやってきた人、10年以上も生真面目に抗リウマチ薬や鎮痛剤を飲んできた人、罹病期間が長期に渡った人、さらにリウマチ以外の膠原病も併発している人、長期間アレルギー性鼻炎の治療で、大量にステロイド薬であるセレスタミンを服用したりステロイド注射をしてきた人達のリウマチは、治りにくいのです。というのは、このような患者さんは、リウマチ抗体であるIgG抗体が、アトピーであるIgE抗体に、自然にクラススイッチすることが出来にくい上に、IgE抗体のレベルで、自然後天的免疫寛容が起こりにくいことがわかっているからです。とりわけステロイド注射は、自然に生じるクラススイッチや自然後天的免疫寛容を、徹底的に抑制しているので、この働きが目覚めるのに長い時間がかかのです。さらに、痛みを強く止めてきたので、ステロイドを止めた後に生じる激しいリバウンドによる痛みを耐え切れねばならないので、患者の体力と忍耐力が試される極度の試練となります。ところがステロイド注射が全ての痛みを断トツに即効性があるので、リウマチと診断される前から五十肩や腰痛と診断して、気軽にステロイド注射をやり続け、ステロイドの意味を全く理解していない整形外科医が、全国津々浦々に多すぎるのは、至極残念です。★でもこの医師が一番正直なのかもかもしれません。この市民病院で最後になった医師は、小まめに検査をし、あちこちのレントゲンを撮ってくれました。首の後ろがとても痛くて、後ろは勿論横を向くのもゆっくり恐る恐るしなければならなり、頸椎のレントゲン写真を撮って診てもらおうと「やっぱりこの所が侵されているね。」と言われました。とうとう頸椎にまで来たか。★頸椎がリウマチの炎症を起こしていても、私の治療により痛みが消えたのみならず、機能も完全に戻るという事実は、極めて貴重です。一般には、頸椎が最後に侵される部位であると言われており、すぐ近くに生命中枢である延髄があるので、命を守るために残された治療法は、手術しかないと書かれています。そのような患者さんが、完全に回復したのは、教科書を書き換えねばならない特記すべき朗報だと考えます。★首の手術なんて絶対いやだし、痛い目をして手術をしても無駄なことは体験済みだ。これがこの病院を離れる決心を促した一つ目の理由です。二つ目は尿検査でした。この最後の医師になってから、血液検査とともに尿検査を二度したのですが、二回とも血尿がありました。2000年の12月半ば、その日3度目の検査でも血尿があったのです。医師は「たぶん薬の影響だろう。」と言って、色々なファイルや本を見たり何処かに電話をかけておられました。そして「今すぐには分からない。自分はこの年末いっぱい転勤するが、それまでに調べてあなたに連絡します。」と言ってくれました。薬の「影響」と言い、医師でない素人の私でも判断のつく「副作用」であるとは指摘せず、その上その薬をいつものように処方されて不信の念が沸きま

した。★現代のリウマチ治療は、言うまでもなく根本治療ではありません。原因はともかくとして、免役の働きの為に生ずる事は解っているので、やみくもに免役を抑制する薬を投与します。勿論その薬も、人間にとって異物でありますから、それを処理する役目を担っているのは、肝臓と腎臓と免疫です。従って処理能力を超える量の化学物質（薬）が投与されると、肝機能障害や腎機能障害が生じたり、アレルギーが出ます。そのため手遅れにならないように、毎月一回血液検査や尿検査を行って、異常が見つければ、薬の投与を止めるのです。血尿も、その薬のために出現した腎機能障害の症候として、見つけられたものであります。リウマチそのもので血尿が出る事は、決してありません。★でも年の暮れのただでさえ忙しい時期に、しかも転勤されるというのにわざわざ調べて下さるなんてと、私は大層感激しておりました。しかしこの医師からの連絡が入ることはありませんでした。検査数値としてはっきり表れた薬の副作用、それが二つ目の決定的な理由でした。12年前に知っていたし分かってはいたはずなの、リウマチは西洋医学では治らない、という紛れも無い現実が、私の体に、そして心にも重くのしかかってきました。

（2）松本先生との出会い

その2000年の年末は散々でした。頸椎や血尿の件で、心は鬱状態に陥っていたし体調も最悪で、年末の大掃除やお正月の準備はひとつ片付けると横になり、またひとつしては休むという文字通り寝たり起きたりの生活を余儀なくされたのです。

年が明けて2001年、21世紀の幕開けに新聞・テレビは沸き立っている中、私は重苦しい心身を引かずのまま、あの全身のけだるさに寝正月を過ごしました。しかし体を横にしても心の休まる時はひと時としてなく、常にこのままではいけない、何とかしなくては、どうしたらいいのだろうと思い巡らし、悶々としていました。★私が医療界に最も貢献している事は、リウマチの患者さんの病気を治しているという事実よりも、治る病気だと断言し切り、これを世間に知ってもらえる事です。如何に心の強靱な人間も、死ぬまで徐々に悪化する病気を背負っていく宿命に出会えば、必ず鬱になってしまうでしょう。私も、強度な偏頭痛が治らないということを知った時に、本格的なうつ病になり、5年間近く自閉症同然の精神生活を送ったこともありました。20年近く、常に自死を考えながら生きてきました。この時に、必ず治るという確信を与えてくれる医者との出会いがあったならば、あれ程苦しまなかった事でしょう。世界中のリウマチの患者さんの皆さん、リウマチは必ず治る病気なのです。最近、私のインターネットを読んで、遠方から来られたリウマチの男性の患者さんが、とっても素敵なセリフを伝えてくれました。「先生の論文の中に、『リウマチは風邪よりも楽な病気です。何となれば、リウマチで死ぬ事はないから。』とあるのを読んで、リウマチの苦しみの全てが消えてしまいました。」と。勿論、私の言葉にただし書きが必要です。現在の間違った一切

の医療を受けなければ、と。とりわけステロイドの注射は、絶対にさせてはいけません。アトピーの治療で、ステロイドを使うことが、患者にとっては最悪の治療だということが分かっているのに、さらに影響の大きいステロイド注射やステロイド内服剤を投与する整形外科医が、全国に余りにも多すぎる事は、残念です。ステロイドの注射が許されるのは、生死を分かち緊急事態から一時的に逃れる場合だけです。というのは、早かれ遅かれ、必ず再び、炎症と免疫の働きが、倍になって戻ってくるからです。つまり、ステロイドの離脱症状が、必発であるからです。★

2001年1月5日、運命の日が来ました。その日の10時過ぎだったでしょうか、主人に相談するとすぐにインターネットで調べてくれました。主人の「ここはどうや。」と開いてくれたパソコンのディスプレイには「松本医院」と大きく出ていたのです。私が「どこにあるん？」と聞くと「高槻らしいで。」★どうせ見るんだったら、もっと早く私のホームページを見てもらいたかったのに、と思うのは、この患者さんに対してだけにはありません。私との出会いが、早ければ早いほど苦しみは少なく、治るのも早くなります。ところが、現代の医学の本にもリウマチは早期発見・早期治療と書かれていますが、絶対に治るとは書いていません。しかも、現代医療の治療を早く開始すればするほど、根本治療から遠ざかると共に、薬の副作用で、一層悩まなければならなくなります。つまりリウマチ以外に、新たなる病気を生み出すこととなります。私の治療とは、全く異なります。私の治療は、早期発見・早期治療・早期完治となります。★

「松本医院」「高槻」ふたつのキーワードにピッと閃くものがありました。どこかで聞いたことがあると思いました。長女と次女の同級生がおられるすぐご近所のHさんのことが思い浮かぶのに、数秒とかかりませんでした。Hさんとは町内の子供会活動で親しくさせて頂くようになり、次女と同級生の娘さんがアトピーの治療で「高槻の松本医院」に通っておられることを聞いていたのです。大変な時期があったが今はとてもよくなっていると、喜んでおられました。そんな話の中でHさんが「リウマチの人も来られているよ。何ヶ月か前に見たときは歩くのも靴を履くのも大変そうだったのに、この前はさっさと歩いてらしたよ。」と言われました。自分がリウマチであることを決して人に知られたくなかった私は「ふーん。」としか返事をしませんでした。しかし耳をダンボ（ディズニーの子象）のようにして聞いたその話は、頭と心に深くきっちり刻み込んでいたのです。私はすぐに受話器を取り、その日・1月5日とその年の初診察日で、予約の必要もないとのこと、午後の診察の時間は三時半であることなどを伺いました。

私は、食い入るように「松本医院」のホームページを見ました。リウマチ関連の所にだいたい目を通すと、主人に今日（その日のうちに）松本医院へ車で送ってほしいと頼みました。この時のホームページにはまだ、あの凄い理論は掲載されていなかったし、リウマチの手記も今ほど多くはありませんでした。この時点で私が、『理論は西洋医学で武装し、臨床は3000年の臨床経験医学である漢方を利用した、松本先生独自の漢方医学である』ことを、決して理解していたわけではありません。理屈ではなく勘というか直感が、松本先生が信頼するに値する人だというこ

とを教えてくれたのです。手記に書き込まれた松本先生のコメントは私を納得させるのに充分であったし、手記の最後にあった検査値のグラフが、手記と松本先生がニセモノ・ウソでないことを証明していました。普通の病院に十数年通って何度血液検査をしたことでしょうか。検査数値なんて悪くなるのがほとんどで、約九割、たまに横ばいだったり少し良くなることもありましたが、次には必ず上昇していました。それなのに手記を書かれたどの方の検査数値も、途中からどんどん良くなり、最後には正常値になっているのです。★現代医療のリウマチの治療の最中に、検査をしても全く意味はないのです。それは、正しい免疫の働きを抑制する薬を投与している時に、体の免疫の状態を見ても偽の情報しか手に入らないからです。値が悪ければ薬を増やし、値がよければ薬を減らすという、シーソーゲームをやればやるほど根本治療から遠ざかり、最後は薬の副作用で、悩まざるを得ないのが関の山です。免疫を抑えてはいけないのは、人の心の正義感を抑えてはいけないのと同じです。免疫を抑える事を許されるのは、抑えなければ命がなくなる場合だけです。★一方漢方の医師の所にも通ったことがあります。そこで血液検査をしたことは一度もありません。★日本人は珍しがりで、根拠も無しに新しいものに飛びつきます。確かに、目先を変えて新しい治療法に飛びつく事が、幸運をもたらす事もありますが、どんな治療法も、正しい治る理論がベースになれば意味のないことです。漢方は中国が本場ですが、私のように、リウマチを漢方で治せると豪語できる中国本土の中医（ちゅうい）や日本の名医と言われる漢方医の中には、誰もいません。それは彼らが、リウマチを治す理論を、全く知らないからです。それどころか近頃は、本場の中国でも、東洋医学ではリウマチは治せないという理由で、アメリカや日本の西洋医学の真似をし始めています。残念です。★病状が良くなっているという感覚は体でも心でも感じられなかったし、検査数値というものはっきり目に見える形での病状の変化も当然の事ながら無いので、不安が付きまわっていました。松本先生に、今までのどの医師とも違う何かを感じた私は、その日の夕方、松本医院の前に立っていました。それにしても、主人がインターネットから最初に出してくれたホームページが「松本医院」であったことに、今改めてぞくぞくする程に運命的なものを感じています。幸運・幸せへの扉が開かれたのです。★私の患者さんで最も賢い人は、読んだその日に私の医院に馳せ参じられる方です。その意味では、この人は当院の患者さんの中で最も聡明な方の一人です。医者や学者でさえ理解できない私の理論を、それなりに理解し、患者の手記のコメントも納得して来られる患者さんこそ、私の治療を請ける資格が与えられる方です。いわば、この世に生まれ出ようとしているダイヤモンドの原石を、見分ける直感を持った患者さんです。だからこそ、このような素晴らしい手記が書けるのです。手記を書いてもらうのは、何も随筆を書いてもらうためではありません。私の理論が世界に認められるまでには、これからも長い道のりが待っているでしょう。それまで私の理論を支えてくれる人達は、私の治療により理論どおり治っていく患者さんであり、かつ、嘘偽りのない説得力のある詳細な証拠となる、このような手記です。勿論、良くなった患者さんのほとぼり出るような喜びも、このような手記を通じて、今苦しんでいるリウマチ患者さんに伝えたいのは、言うまでもありません。★

初めて訪ねた松本医院であり、一度も会ったことのない松本先生でいらっしゃるのに、全くといっていい程に、意外に思ったり不安を感じるようなことはありませんでした。★初めて私のこのホームページを読まれた方は、どんな人も真実の記録であるかどうかを、まず疑われるでしょう。こんな疑問を簡単に解く法律があれば、私のこのような疑いに対するストレスは、ゼロになります。その法律とは、嘘の情報を通してお金を儲ければ、2倍返しをするという法律です。首を長くして、この法の成立を待っているのですが、いつ出来るでしょうか？そうなればあなた方も、いかなる情報にもだまされる事が、皆無となることでしょうに。ただこの方は賢い方ですから、直感的にも論理的にも、私が嘘をついているわけではないと、完全に分かって受診されたものですから、私に何一つ、不安を感じられなかったのでしょう。賢明な人にとっては、「この私のホームページを見た。受診した。治った。」ということが、始めから分かっていると言っても過言ではないのです。従って、リウマチ完治の唯一の条件は、私との出会いだけです。★多くの人で溢れる待合室でも手記を読ませて頂いていると、近い将来自分も元気になるとの思いが、膨らんでいきました。自分が手記を書いている姿を想像したりして、思わずにんまりしてしまったものです。話は逸れますが、ここで絶対に治る・絶対に手記が書けるようになるんだと思っていたのに、実際にそうしてみると書かせて頂くのが半年以上も遅くなってしまい、本当に申し訳ございません。こんなに元気にして頂き、嬉しくて嬉しくてどんなに感謝してもし足りないと思っているのに、どうしてなかなか手記が書き始められないのか、自分でも不思議でした。でもここまで書かせて頂いてホッとした時、そのわけに思い当たるものがありました。発病以来松本先生にお出会いするまでの、私にとって大変厳しい十数年を書き記すのが辛くて、逃げていたのではないかと思います。松本先生に不快な思いをさせてしまい、本当に済みませんでした。★アトピーにしる、リウマチにしる、治してあげたにもかかわらず、手記を書いてもらっていない患者さんが、数え切れないほどいます。世界の全ての医者が、治らないと断言している病気を、私が見つけた理論と治療法で私自身が大声で、リウマチは治るといった所で、誰が信じるでしょうか？治してもらった患者さんだけがこの事実を体験し、心はもとより体から、この真実を世界に訴える事が出来るのです。いわば、リウマチ完治の生き証人なのです。この証人の心からの叫び声を、誰が疑うのでしょうか？リウマチを治したいと思う人は、私が治してあげます。私との出会いが早ければ早いほど、早く治ります。治りもしない現代医療をたっぷり受けた人ほど、治りが遅くなります。ただそれだけです。ステロイドを絶対使ってはいけません。単なる痛みで、ステロイド注射をしては、絶対ダメです。★

不安はなかったものの、私は大変緊張して松本先生の前に座りました。先生は、やはり「治してあげるよ。」と威勢良く言って下さいました。そして、やはり握手をして下さいました。その手は意外に小さくて、白く細長い指でした。赤く腫れ上がっていた私の手の方が、先生の手よりはみ出しているようで恥ずかしく思ったものです。そしてその手は、とても柔らかく温かいものでした。大きく分厚くて硬くごつごつとした力強い手を想像していた私は、少なからず驚きました。「松本医院」のホームページから私がイメージしていたのと違ったのは、唯一、繊細さを物語る

その華奢な手だけでした。★私は、偽善家になるよりも、偽悪家になりたいのです。勝手にイメージを膨らませてもらって、特別な医者だと思われたくないのです。生業として、医療をやっているだけであり、ただその責任は病気を治す事です。私がリウマチを治しているのは、全く当たり前の事です。たまたま他の人が治せない病気を、治す事が出来るだけです。治せる病気を治せると言っているだけで、他に何の意図もありません。私は元来、医者になったのは、医者になりたくてなったのではありません。自分の病気を治すためだけだったのです。まず何よりも、私は医者である前に、一人の人間でありたいのです。従って、私が治せる病気を、何故他の人が治せないのかについて語る事のほうが、はるかに興味があります。リウマチもアトピーも、私の理論と治療法をもってすれば、全て治るわけですから、その福音たるや無限大です。にもかかわらず、世の中に、私の治療法が何故普及しないかについて考える事の方が、はるかに興味があります。これは、政治の問題です。従って政治の話もしたがる男です。民主主義とは、元来、政治システムを意味します。つまり、民衆の全てが、政治的人間になることを前提条件として、要求されるのです。ところが、ほとんど全ての人が、政治について無知です。何故こんな事が、まかり通っているのでしょうか？医者も政治家も一般大衆も、だれも責任を取らなくなりました。また何故、全ての人が、このように無責任になったのでしょうか？考えて下さい。★

最後に、やはり大目玉を食らいました。十年もの長い間抗リウマチ剤と鎮痛剤を使ってきたのだから、それ相応のリバウンドは覚悟の上で松本先生を訪ねておりました。しかし長女は高校三年生、次女は中学三年生で、それぞれの受験が目前に迫っており、それが終わるまでは私が倒れるわけにはいきません。それで三ヶ月間だけ鎮痛座薬の使用をお願いすると、先生に一喝されました。そしてあきれたような憐れむような顔をされ「俺の仕事を増やして、その分金儲けさしてくれるんやな。」と言われました。この時の私は、松本先生のこのハイレベルのウィットを、ぼんやりとしか理解出来ませんでした。「西洋医学の薬を止めない・使い続けるということは、完治とは全く逆方向であり、その分余計に完治までに時間がかかる、そしてその西洋医学の薬の弊害を取り除くことが、松本先生の仕事のほとんどだからである」ということがハッキリわかったのは、アトピーの手記に書き込まれた松本先生のコメントを読んでからでした。★西洋医学は、根本治療が不可能であることは言うまでも無く、対症療法も、一時的に見せかけの症状が良くなるだけで、薬を止めれば、症状がなお一層ひどくなる事や、その他の副作用については、全く触れられていない点が、問題なのです。免疫を抑制すると、どのようなやり方にしろ、必ず免疫からの逆襲であるリバウンド（反跳現象）が起きるのです。免疫の第一原理として認識されるべきなのに、完全に忘れ去られている事柄が、「免疫は抑制されれば、抑制された事を覚え続け、抑制の効果が切れた時に、必ず免疫の働きを再開する。」ことです。つまり免疫を抑えることは、意味が無いという事です。この事実を、医者は患者に伝える事をしないために、不幸が起こるのです。この不幸の後始末の大部分を、私がさせてもらっているのです。私は構わないのですが、当の患者さんの苦しみを、患者さん以外の一体誰が、引き受けてくれるのでしょうか？もち

ろん、どんな患者さんも、前もってこの免疫抑制剤の副作用を告げられたならば、誰も使わないでしょうが。★

診察の後、看護婦さんに血液検査をして頂き、鍼灸師の織田先生に初体験である鍼灸治療をして頂きました。痛くて動かし辛かった首が、なんだか軽くなったような気がしました。そして家でのお灸のやり方を教わり、漢方薬を頂いて帰ったのです。

(3) 松本先生は、私の救世主

「救世主」を広辞苑で引くと

- ① キリスト教で、イエス＝キリストの称
- ② 人類を救済する者。メシア
- ③ 苦しい場面から脱出できるよう尽くしてくれた人。

とあります。無論③の意味（私を救ってくれた人）で使わせてもらったのですが、松本先生は②であると言ってもいいと思っています。事実、私を含めて数え切れなほどの人達が松本先生のお陰で元気になったし、これからもそうであるからです。★私が唯一の救世主である事を終える日も、近い事でしょう。というのは、いずれ私の理論と治療法は、世界中に広まる日が近いからです？（と心から望んでいます）今の私の仕事は、受診されたリウマチの患者さんを、一人一人確実に治していくことが全てだと考えています。ところで、リウマチ患者さんを、1万人以上治したら、ノーベル賞をもらえるのかなあ????????★

次の日私は、早速大きなスーパーに行って土瓶と線香を買い求め、漢方煎剤を飲み、お灸をしました。初めて口にする漢方煎剤（今までに飲んだことのある漢方薬は、全て顆粒状のものでした。）はとても飲みづらいものでしたが、これを飲めば必ず治るので、こんな嬉しいことはありません。★この方のように、これほど明確に、頭も心も私を信じてくれたのは、半分以上治療が終わっている事になります。つまり心のリウマチが、まず完治し終わったことになるからです。残るのは、肉体のリウマチだけになるのです。私の治療を受けながらも、疑心暗鬼の患者さんがときにおられます。私は、そのような患者さんに、はっきり告げます。私の医院に来るか来ないか、私に治してもらおうかもらわないかの、どちらかであり、「来る以上は必ず治してあげるから。」と、言ってあげます。さらに、時には冗談まじりで言うのですが、「治らなかったら、払ったお金は全部かえしてあげるから、治った時には、2倍お金を下さい。もしよければ、契約書を作りましょうよ。」と。今のところ残念ながら、この契約書には誰もサインしてもらっておりません。★大した効果がなく副作用があるのに、それ故決して治らないから飲み続けなければしか

たのないという、全く矛盾した西洋医学の薬から開放され、えも言われぬ喜びが、口には苦い漢方煎剤を、心では甘露の如くに感じさせました。★この方がこれだけ私の治療を確信されたのは、やはり私の理論を完全に理解されていたからだと思います。皆さんも、必ず、5回以上読んでください。患者さんの手記も大事ですが、それ以上に大事なものは、治る根拠である理論ですから。)

夜はお灸です。これも私自身は初体験でしたが、幼い頃祖母が母に、背中に大きなお灸をしてもらい、「あちっ！」と小さな体をさらに締めながらも何だか嬉しそうだったのを、懐かしく思い出しました。腫れ上がった両手首・両足首は自分で据え、がちがちに凝って硬くなった肩と背中、痛くて動かしづらい首の後ろは、自分で出来ないのので子供達に頼みました。子供達は、初めて見るお灸を大層珍しがり、はしゃぎながら交代でしてくれました。それぞれ自分の手や足に据えてみては「ウー、ギャー」などと叫んでおります。本当に久しぶりに親子で大笑いをし、楽しいひとときとなりました。

毎日お灸をするのは、正直なところ時間と手間がかかって大変でした。でもお灸をした後は、驚くほど体が軽くなるのです。たいして歩かない(歩けない)のに、重くて引きずるようにしていた足取りが、スルスッと進むのです。昔囚人の足に付けられていた大きな錘を、取り外してもらったかのように軽くなり、まさに囚われの身から開放される気がしました。肩・背中も同様に、大きな荷物をおろしたように感じられました。腫れ上がったたり凝ったりして痛む所では熱さはほとんど感じなかった為、お灸後のあの爽快感がたまらなく嬉しいものでした。

長女と次女は受験生だったので受験が終わるまでという約束で、次の夜からのお灸は、小学5年生だった息子に、私が出来ないところをしてもらうことになりました。お灸を据える前には、その箇所には赤い塗り薬を塗ってもらいます。息子は面倒なので、赤い塗り薬を容器から指でぐいっと取り出し、手のひらを一杯に広げて私の肩や背中に手荒くなすりつけていきます。あかぎれが酷く、ガサガサ・ゴワゴワしていた息子の手でされると、背中でも少し痛かったのですが、ある時ふと、痛くなくなっていることに気がつきました。息子の手を見てみると、なんと、あのあかぎれは跡形もなくなって、柔らかでなめらかなものになっているのです。大喜びしてその手を撫でまわす私に、息子は苦笑いをしていました。お灸の効果は、思わぬ所にもあったのです。★お灸をする意味は、第一に、局所に瞬時に数百度を超える熱を加えることによって、血管を最大限拡張することによって、周囲から血流を集めて、炎症産物を一挙に流し去ることです。その結果、発痛物質も運び去られると同時に、炎症の跡の修復物質を運んでくれます。漢方を飲む事によって、これらの老廃物を腎臓で処理するのです。第二には、熱を加えられて変性した皮膚(人為的な火傷と言える皮膚)が、免疫によって、異物と認識され排除されるために、アトピーを自然に生じさせる事です。するとBリンパ球は、大量の熱によって変性した自分の皮膚の細胞を、殺すものではなくて外へ排除すべきものと認識して、リウマチ抗体であるIgG抗体をクラススイッチさせて、IgE抗体を作るように、自然に変化していきます。(そのメカニズムは、遺伝子学的には、京大の本庄庶先生によ

って解明されていますが、何がクラススイッチをするように指令するかは、知られていません。) IgE抗体が作られれば作られるほど、IgG抗体の産生が減少し、リウマチに使われるリウマチ抗体も減少し、リウマチの痛みも楽になっていくのです。第三に、熱を加えることによって、物理的に痛みの感覚を麻痺させ、痛みを楽にする事も可能になります。いわば、痛みを熱さに変えると言ってよいでしょう。第四に、経絡(けいらく)の経穴(つぼ)にお灸を据えることは、血液やリンパ液の流れをよくすることによって、免疫が高まり、クラススイッチも出来やすくなる上に、アトピーが生じてからも、自然後天的免疫寛容にもなり易くなるのです。免疫は、このように刺激するほどよいものですが、決して抑制してはいけないのは、いまさら言う必要もないでしょう。ちなみに、お灸の跡が残るからといって、おざなりなお灸で済ます人がいますが、いずれ必ずお灸の跡も消えてしまうものです。

★

織田先生は、私のたくさんのお灸の跡をご覧になり、そのお灸を小学5年生の男の子がしていることがわかると、ものすごく褒めて下さいました。お灸をすると体が軽くなって気分がよくなるという実感があり、やればやっただけその効果があることを、私のこの体が知っています。だからしているだけですのに、治療の度に織田先生は褒めて下さり、他の患者さんにも宣伝して下さいました。私は益々嬉しくなって、お灸にハマっております。★この方のように、一日に全身に数百箇所し続けた人もいます。いや、千回(千壮)も、お灸を据えた人もいます。激痛があり浮腫みの強い局所は、お灸を据えれば据えるほど、症状は軽減します。いずれにしる、リウマチの治療は、一人で出来るものではありません。この方の家族の皆さんのように、愛情にあふれた協力が、絶対に必要です。★

一方、松本先生よりアトピーの手記もよく読んでおくようにとの宿題がありましたので、「松本医院」のホームページを開き、引き込まれるように読んでいきました。★リウマチの完治の終盤には、必ずアトピーが出ます。私がリウマチを治す事が出来るのは、何回も触れているように、アトピーをも治す事が出来るからです。さらに加えると、リウマチとアトピーとは、結局は、同じ病気である事を見つけたからです。この3つの事実を見つけたのは、3億円の宝くじに、3年連続して当たった幸運に相当するのですが、治った患者さんしか認めてくれない事は、残念な事です。いずれにしる、この方も、元来アトピーも鼻炎もあった方で、現代の間違った皮膚科や耳鼻科のアレルギーの治療の果てに、リウマチになられたのです。このように、リウマチの多くが、わざわざ人体は、賢明にも異物を正しく抗体のクラススイッチをして、アレルギーで排除しているにもかかわらず、それを抑制したために、抗体の「いわゆる逆クラススイッチ」が生じ、IgE抗体の代わりにIgG抗体が増加し、リウマチになってしまったのです。従って、リウマチの正しい治療法は、正常な元のクラススイッチをさせてあげて、最後はアレルギーに戻し、IgE抗体のレベルで、始めて自然後天的免疫寛容を起こして、リウマチもアレルギーも一緒に完治してしまうわけです。従って、私がリウマチを完治させることができるのは、アトピーを完治させる事が出来るからです。ところで人によっては、リウマチ以上にアトピーの治療の方が、はるかに難しいことがあります。それは、アトピーに

際しては、感染症が新たに問題になるからです。リウマチの治療中に感染症のことを心配する必要は、全く無いからです。その為にも、全てのリウマチ患者さんに、必ずアトピーの理論と手記も、義務的に読んでもらうわけです。ちなみに、アトピーや花粉症の人が免疫を抑えなければ、リウマチになるのはあり得ないのです。というのは、I g G抗体が一度IgE抗体にクラススイッチすれば、逆に戻ることはないのです。先ほど「いわゆる逆クラススイッチ」と言ったのは、免疫を抑制すれば、Bリンパ球のクラススイッチをする働きも抑制されるので、I g G抗体が自然にIgE抗体に変換されることが出来なくなるため、いつまでもI g G抗体が作り続けられて、リウマチ抗体であるRF（リウマチ因子）が減らないのみならず、さらに、I g G抗体にも変化しないで、その変化する前のIgA抗体やI g M抗体も、リウマチの患者さんの血液の中に見られるのです。ここで、原点に戻って、抗体の話を復習しましょう。抗体には、5つのクラスがあります。I g M抗体、I g D抗体、I g G抗体、IgA抗体。最後にIgE抗体があります。これらの抗体を作るのは、Bリンパ球です。骨髄から生まれたばかりのBリンパ球は、最初にI g M抗体とI g D抗体を作ります。これらの抗体が、Bリンパ球の遺伝子の組み換えにより、I g G抗体とIgA抗体に変わります。これが1回目のクラススイッチです。次に、これらの抗体が、2回目のクラススイッチして、最期にIgE抗体を作るのです。★体のだるさや、首や手足の痛み・肩のこりも忘れ、どのくらいの時間読んだでしょうか。幾度となく涙が溢れ、時には患者さんの本音やそれに対する松本先生のユニークでウィットに富んだコメントに、クスツとなりました。その中で西洋医学の病院に勤めておられた看護婦さんの手記は、感動・感銘というより、私には大きなショックでした。西洋医学の渦中にありながら漢方医学の松本先生を信じ、想像を絶する過酷なリバウンドを乗り越えておられたのです。ステロイドをはじめとする薬の恐ろしさを思い知らされると共に、受験が済むまで座薬を使わせて下さいなんて甘んじているわが身を振り返ると、恥ずかしくてたまりませんでした。そして、松本先生を『チョビヒゲ大隊長』と称された方（ホームページのスタッフをされているFご兄弟のお兄さんでした。）の手記に背中をポンと押されて、座薬の使用をやめる決心をしました。初診から十日足らずが経っていました。診察の折に、座薬をやめていることを松本先生にお話し「先生にお金儲けをして頂けなくなりました。すみません。」と申し上げると、先生はニツと笑われました。★何回も繰り返して言っているように、リウマチは、風邪の治療よりも楽なのです。ただし、一つだけの絶対条件が要ります。受診される前に、現代医療の免疫抑制という阿呆な治療を一切受けておられないことです。残念ながらそんな人は、滅多にいません。それどころか、恐ろしい程の間違った治療を受けてこられた例は、無数にあります。ステロイド静脈注射を何十本もやられた人、痛い関節に100本以上もステロイドを注射をされた人、有名なステロイド内服剤であるプレドニンを何万mgも服用した人、副腎抑制の強いリンデロンを大量に服用してきた人、この人達のステロイド離脱の際のリバウンドの苦しみのたるや、生き地獄です。ただアトピーと違って、痛みとだるさだけが主要な問題になり、身動きが長期間不可能となり、時には寝たきりになるだけで、感染症の恐れは全く無いので、生死の淵をさまよう事はないのです。その他様々の無意味な免疫抑制剤を、たっぷりとぶち込まれた来た患者さんばかりです。従って私の仕事の全ては、これらの薬の影響を除去する事なのです。とりわけ、

ステロイドホルモンのプレドニンやリンデロンは、副腎皮質の働きを抑制しているので、急に止める事ができないのです。急に止めると、ショック死することがあります。しかも、このような非常に大切なステロイドの副作用さえ、患者に伝えない医師が多すぎます。このステロイドを止めて、副腎皮質の機能を正常に戻すだけでも、大変な事なのです。従って私の仕事は、他の医者で作った病気の後始末になるので、この患者さんは、痛み止めの座薬を使わなくなると私の仕事が減る事を、よく理解しておられたので、面白おかしくこのような皮肉を言われたのだと思います。

★

西洋医学の全ての薬を止め松本漢方医学オンリーになって、私は清々しい思いでした。忌々しい抗リウマチ剤や鎮痛剤のほかに、胃薬や風邪薬をしょっちゅう飲んでおり、まさに薬漬け（毒づけ？）だったので。覚悟していたリバウンドも、幸いなことに思ったより軽いものでした。★この方は、12年間のリウマチの罹病歴があったのですが、その初期の2年間は、妊娠と授乳の期間でした。その為にリウマチ薬を飲めなかった事と、さらにこの患者さんは、ステロイドの怖さを骨髓まで知り抜いておられたので、出来る限りステロイドを使って来られなかったことが、リバウンドがそれほど酷くなかった理由なのです。玉に、その分だけ、心のリウマチが重篤だったのです。★漢方煎剤とお灸の効果は絶大で、新たに増えた痛みは右膝だけでした。腫れ上がって曲がらなくなりましたが、耐え難いほどの痛みではなく、夜も眠ることが出来ました。ただ洋式トイレしか使えなくなったことで、いろいろと不都合や不便さを味わいました。尾篋な話になり申し訳ありませんが、漢方煎剤を飲み始めてより、トイレに行く回数がものすごく増えたのです。★漢方は、関節の炎症の後始末を腎臓でやりやすくするために、腎血流量が増えて、その結果、尿量が多くなります。★便秘の悪い方ではなかったせいか、下痢に近い感じになったことがありました。また早く治りたい一心で、漢方煎剤を出来るだけたくさん飲もうと思いかなり大量に飲んでいたので、尿の回数も自分でもびっくりするほどでした。その上1月・2月という寒い時期です。衣服も、分厚いものを何枚も重ね着しているので脱いだりはいたりが大変でした。家では、漢方煎剤を飲んでトイレへ、を繰り返していましたが、外出先では困りました。和式トイレしかない所が意外に多く、もう真っ青になって身障者用のトイレがないか尋ねそこを探し回ったことがあります。一刻の猶予もなく気はあせるのに足が痛くて身動きがままならず、やっと見つけた身障者用トイレでしたが、その前で私は少し戸惑っていました。使うのが初めてだったことありますが、それよりも自分が身障者用のトイレを使わなくてはならないという事実、胸中穏やかならぬものがあったのです。でもこうしたことは、身体障害者や高齢者の方々のことが実感としてよくわかり、よい経験をさせてもらったと思っています。それからは外出先では、先にトイレを確認することにしました。松本医院も和式トイレがひとつだけなので、高槻駅の身障者用トイレを使っていました。

リバウンドが思っていたより軽いものだったとはいえ、時には「松本先生、助けろ！」と叫びたくなるような右膝の痛みが二・三日続いたことがありました。でも不思議なことに、週一回の診察日が近づくときまって治まってきます。あんなに

痛かったのに診察日には笑顔、というのが何回もあったのです。★リウマチは、慢性疾患と考えられていますが、私に言わせると、急性疾患の繰り返しに過ぎないのです。つまり、急性炎症が一過性に生じると、同時に痛みも生じますが、どんな痛みも、数日で必ず消え去ってしまうのです。痛みは、永遠に続くのではなくて、免疫を抑制しなければ、最期には、全て痒みになってしまうのです。私の治療においても、当然、免疫を抑制しないわけですから、必ず痛みが出ます。しかし、その痛みをいかに早く消し去り、痒みに変えてしまうだけが、私の仕事になるのです。最期に、「リウマチも、アトピーも、根治出来る」という事を確信すれば、痛みにも痒みにも耐える力が、倍増するのです。★「松本パワーは凄い！」と思ったものです。私が感じた「松本パワー」の源は、先生の『絶対治る』との言葉に対する信頼であり、それは確信に近いものになっていきました。★何故私だけが、「リウマチは絶対治る」と言い切れるのでしょうか。私が世界で初めて見出した「リウマチ完治の理論」は、「アトピーの完治の理論と実践」から生まれました。ここに至るまでには、長い苦しい道のりがありました。小学校5年生の時に、目に当たった硬球のために、右目の眼球の強度変形と、その時に生じたむち打ち症のために、第2頸椎が徐々に変形していき、中学3年頃から、右の後頭部の偏頭痛の症状が出たのです。勉強したくても、睡魔に襲われ、すぐに眠ってしまったのです。その上、右後頭部が燃えるようで、不愉快で、視界がぼーっとしていたのです。私の特技である、一瞬にして目で覚える力も、どんどん落ちていきました。この原因が分かったのは、京都府立医大の2回生の時でした。その後鬱々として、やっと医者になったのですが、脳血流を改善する漢方との出会いがあった上に、20年近くの間、右後頭部の側副動脈が新たに出来たので、十分な酸素を脳に送る事が出来るようになるにつれて、いつの間にか睡魔も頭痛も無くなったのです。それと共に、徐々に勉強も可能になり、免疫学を、本格的にやり始めたのです。皮膚科の臨床をやっていく中で、アトピーは皮膚の問題ではなくて、まさに免疫の現象である事に気づき、その根治の理論と治療法を見つけ、完成させたのです。同時に、リウマチの患者さんを治療しているうちに、全てのリウマチの患者さんが、アトピー症状を出す事に気がつきました。さらに、本庶祐（ほんじょたすく）先生のクラススイッチの理論と出会い、リウマチもアトピーも、同じ免疫の働きである事をも含めて、全てが腑に落ちたのです。実は、開業後10年の年月をかけて、博士号を取得出来たのも、偏頭痛が無くなったからなのです。ちなみに本庶祐先生は、京大教授であり、日本のノーベル生理医学賞の最右翼の候補者です。★「不治の病」と宣告され、絶望という奈落の底への下り坂をゆっくり転がり落ちていた私に、今、眩く光り輝く「完治」への上り坂がはっきりと見えます。たとえどんなにリバウンドが起きようとも、それは「完治」につながっている出口のあるトンネルに過ぎないのです。こうした精神的なものが、痛みの感じ方を随分和らげてくれたのではないかと思います。★ステロイドを使わなかった分だけ、苦しい心の葛藤があったのですが、私の「リウマチは治る」という理論と実践との遭遇により、一瞬にして、心の悩みが消滅した時に、この方の重すぎた心のリウマチも完治してしまったのです。元来病というもの、1%が肉体の病気であり、99%が心の病ですから、この方のように、とりわけ賢い知性の高い人は、僕と出会うだけで、リウマチは治ったと同然なのです。

★

それどころか、痛みと同等以上に辛かったあの全身のだるさが、ほとんど無くなったのです。プラス（倦怠感の解消）マイナス（右膝痛）を計算すると、断然プラスです。一日のうちで横になる回数も時間も減っていき、家事の量は変わらずむしろ自然に増えていったのですが、以前よりも家事が楽になったように感じました。ある夜、家事を終えてホッと一息ついた時に、口をついて出たのは「ああ、くたびれた（疲れたの意）」でした。調子がいいのでよく動いて（働いて）いたのでしょう。これまでは「しんどい・だるい」でした。よく似ていますが、私にとってはまったく違うのです。「くたびれた」と言えるようになった（体をよく動かせるようになった）自分が嬉しくて、涙ぐみました。★私の治療を受け始めてすぐに、患者さんが、何ともいえない体のだるさが消えていくと、異口同音に伝えてくださると、確実に、リウマチは完治への第一歩を踏み出している事が分かります。リウマチは、炎症を起こす場所が関節であります。免疫の働きの発現の場所の一つに過ぎないのです。実は、体全体の、目には見えない、必死の防御反応による、総力戦なのです。いわば、異物との戦いは、免疫機構、神経系、内分泌系を駆使した総力戦である。それに用いられるエネルギーは、莫大なものです。徐々に良くなると共に、消費されるエネルギーが温存されればされる程、体は楽になっていきます。★

もうひとつの変化は、生理でした。周期が大変早くなったのです。30日ぐらいで遅れる方だったのに20日前後になり、最も早いときは半月でした。周期が早くなっただけで痛みやめまいなどの症状はなく、量も普通か多いくらいでした。松本先生に何うと、やはり漢方煎剤の効果で、血流がよくなり新陳代謝が活発になったからでした。「若くなったんとちゃうで。」と言われ、またニッとあの笑顔を見せて下さいました。★免疫現象であるリウマチは、内分泌系にも大きく影響を与えます。漢方煎剤の効果もあつたでしょうが、それ以上に、乱れていた内分泌系が正常に戻る過程の一つとして、生理にも変化が見られたのでしょ。★

更には、思いがけない嬉しい変化がありました。数年ごとの運転免許証の更新時には視力検査が行われますが、その免許証更新の通知が、誕生日の一ヶ月前・5月の連休の頃に届きました。普段使っているメガネとは別の、ワンランク度のきつい視力検査用のメガネをつくっておき、それで受けていたのですが、それでもよく見えないことがありました。そのため免許証の更新の通知が、いつもならイヤだなあと思うのですが、今回はそうでもありません。バイクや車に乗っている時の標識や、駅にある看板などの文字、テレビの画面なども、以前よりこの所何だかよく見えるようになっていく気がしていたからです。やはりよく見えました。それまでは見えにくくて間違ったりするので、いくつも答えなければならなかったのに、あっという間に終わってしまいました。結婚以来20年以上使ってきたメガネは、一部欠けていて相当くたびれていた。この機会に買い替えようと思い、眼鏡屋さんに行きました。そこでよく検査をしてもらおうと、ワンランク度の低いメガネでいいと言われたのです。度を低くしてメガネを買い替えたのは、初めてでした。眼鏡屋さんも「珍しいですね。良かったですね。」と言ってくれました。今年の私の誕生日プレゼントは、ビッグなものになりました。漢方煎剤とお灸、それに毎日お風呂での首や肩の体操の成果で、首の痛みや肩の凝りが随分解消された為なのでしょう。

首の痛みや肩の凝りが軽減されただけでも嬉しいのに、視力まで良くなるなんて、喜びより驚きでした。

松本先生にお話しすると、先生はやはりニッとされ、力強く握手をして下さいました。そして眼科医の診察を勧められ、眼科医が松本医院に来られる日の書かれたメモを下さいました。6月初めの日曜日に（松本医院は、土・日にも診察して下さいます。それこそたくさんの医院・病院に行きましたが、松本医院の他に、土曜日はあっても土・日の両方診察されている所を、私は知りません。）伺い、視力検査と眼科の先生の診察を受けました。この時もやはりよく見えたとし、眼科の先生は「白内障もないし、大丈夫ですよ。」と言って下さいました。この時の私は、視力のことでは有頂天になり、白内障のことはあまり気に留めていませんでしたが、松本医院になぜ眼科医が定期的に来られているのか、そしてなぜ白内障のことを言われたのかが分かったのは、私にアトピーが出現した後の事でした。そして、今「松本医院」のホームページのスタッフをされているFさん（F兄弟の弟さん）の手記を読ませて頂いた時には、現代西洋医学によるアレルギー治療の、あまりの「残虐さ・残忍さ」に暗澹たる思いになりました。★ステロイドの副作用は、単に免疫を抑制して、後でリバウンドという、免疫の逆襲に苦しむだけではありません。ステロイドの副作用の項目の中に書かれているように、ステロイド白内障もあります。これを間違えて、アトピー性白内障と巷で言われていますが、アトピーで白内障になることは、絶対にないのです。さらに、リウマチで骨粗鬆になることも滅多にないにもかかわらず、多くの医学書には、リウマチを放置しておくとも骨粗鬆になると、間違えて書かれています。それを鵜呑みにしたほとんどの医者達が、ステロイドを使い始めてしまうのです。実は、このステロイドこそが、骨粗鬆を引き起こす真犯人であるのです。リウマチに対する、許し難い冤罪です。

元来、リウマチは、汚染環境から人体の関節に入り込んだ無生物である異物を、殺す必要がないにもかかわらず、殺すべき生物だと思い込み、過剰防衛をして、生物を殺す事の出来るIgG抗体を作り、痛みを引き起こしてしまう、無駄な過剰反応なのです。始めから無生物を排除するためのIgE抗体を作るべき所を、生物を殺す為のIgG抗体を作ってしまうこと、これこそが、本当は、過剰反応（アレルギー反応）と呼ぶべきものです。ところが残念な事に、免疫は、時に、始めから、自分の敵を、殺すべきか排除すべきか、また無生物か生物かを、判別出来ないことがあるのです。従って、いくら賢明な免疫と言えども、敵が無生物であるにもかかわらず、始めは、人体を殺す生物だと思い込んで、このような無駄な過剰反応をするのは、当然の事なのです。ところが、その敵が無生物である事に気がつくと、IgG抗体をIgE抗体に作り変えて、正しい正常な免疫反応であるアトピー（所謂アレルギー）を起こさせます。この時に初めて、無生物を殺すのではなく、IgE抗体を用いて、皮膚から排除出来るシステムを作動させるのです。最期は、自分に危害を及ぼす異物ではないと判断した無生物に対しては、自然後天的免疫寛容を起こして、共存出来るようになっていくのです。これを、世界で初めて、私が、臨床的に見つけ出し、最新の免疫学の知識を正しく理論化したのです。ちなみに、生物である異物に対しては、絶対に、自然後天的免疫寛容を起こし得ないのです。というのは、生

物は人体中で増殖し続け、最期は人間を殺してしまう可能性があるので、共存出来ないからです。以上が、私の「革命的リウマチ完治の理論」の根幹なのです。つまり、リウマチは、正しい免疫反応の出発点であり、アトピーは、正しい免疫反応のゴールなのです。リウマチも、アトピーも、絶対に、間違った免疫の反応ではないのです。本当の敵は、環境の中の、汚染化学物質なのです。★

尿検査に、異常がなくなった（血尿が出なくなった）のは言うまでもありません。看護婦さんが「きれいなものよ。」と言って、にっこりして下さったのを忘れません。

ここで「松本パワー」の成せる技の数々、「松本ミラクル」をお披露目したいと思います。

- ① ニヶ月が過ぎようとする2001年3月初め、肘と同じくらいの太さになっていた両手首の腫れが、スーッとひいてきた。手の甲の筋や骨が見えてきた。
- ② それまで止まらなかったブラウスの袖口のボタンが、はまるようになった。衣服の着脱が、楽になった。
- ③ キッチンの布巾や台ふきが、ギュッと絞れるようになっていた。ぶら下げていた布巾や台ふきからいつもポタポタ垂れていた滴が、落ちてこなくなったので、気がついた。
- ④ 食事を用意する時、家族に「これ、切って」「あれ、持って行って」などと頼まなくなった。（人に頼まなくてもいい、自分で出来ることの何と嬉しいことか。）鍋物用の大なべをテーブルに運べた。半年過ぎた2001年夏には、なんとカボチャやスイカ、トウモロコシが切れた。
- ⑤ 洗濯物を、パンパンと振ってしわを伸ばしてから干すようになっていた。手首を振り回すなんて、これまでなら考えられない行動だ。
- ⑥ ニヶ月足らずでリバウンドの右膝痛がよくなると、階段の手すりを持たなくても昇り降り出来るようになった。もうしばらくすると、階段の一段一段、片足を交互に出して降りることが出来るようになった。それまでは一段降りるのに、両足をそろえなければならなかった。
- ⑦ 膝から下、踵まで寸胴でゾウの足のようにだった両足首の腫れが、少しずつひいてきた。くるぶしが現れ、ふくらはぎがわかるようになった。
- ⑧ 卒業式・入学式やお葬式などで、パンプスを履いたままでいることが出来た。それまでは痛いので、イスにすわっている時は脱いでいた。今では、ワンサイズ小さい靴が、履けるようになった。

- ⑨ 診察日、時間がないと思ったら駆け出していた。松本先生に報告すると「そのうちスキップもジャンプも出来るで。」と言われ、ニッ!
- ⑩ 立ったり座ったりが随分楽になり、正座も出来るようになった。
- ⑪ 首の痛みがとれ、上を向いたり横を向いたり、後ろを振り返ったりがスッと出来るようになった。バックが見やすくなり、車やバイクの運転が楽になった。またコップに入れた飲み物が、とても飲みやすくなった。
- ⑫ 風邪を、あまりひかなくなった。しょっちゅう風邪をひいて鼻の奥や喉が痛くなり、風邪薬が手放せなかったのに調子がいい。ひいても松本先生の風邪薬(漢方煎剤)を飲むと、すぐに良くなる。★この方は、痛み止めとしては、ボルタレン座薬だけを毎日使い、それに加えて、抗リウマチ薬を毎日服用しておられたので、それなりに免疫に抑制がかっていたので、風邪を引きやすかったのです。実は、風邪のウィルスを殺すのも、リウマチで痛みを引き起こすのも、免疫の働きとしては、ほとんど同じだと言ってもいいのです。というのは、人体に異物が侵入すると、免疫はその異物を認識し、そしてTリンパ球に提示し、最期にBリンパ球にIgG抗体を作らせるまでは、ほとんど同じなのです。ただ、やっつける相手が違うだけです。つまり、IgG抗体で捕まえている相手が、ウィルスであれば風邪になり、無生物の化学物質であれば、リウマチを引き起こすのです。リウマチ自身は、いわば免疫の亢進状態ですから、常に免疫の働きが刺激されて、活性化していると言えるので、あらゆる異物を認識しやすく、何も免疫を抑制する治療をしなければ、風邪も引きにくく、さらに癌にもなり難いと言えます。★
- ⑬ 時々あった顎やこめかみの痛みがなくなり、食事がしやすくなった。
- ☆⑭ 倦怠感がなくなり、よく食べ、よく喋り、よく笑うようになった。体重は一時減ったが、少しずつ増えて、発病前に回復しさらに増加中。診察日、体調は良いし松本先生にお会いできるのは嬉しいので、満面に笑顔を浮かべ(たぶん)大きな声で(そうになっていた)挨拶させて頂くと、先生が「あんたの妹さんが来たかと思うたで。ここに来た時より10は若く見えるで。」と、最大級のほめ言葉を下さった。そしてニッ!★良くなってくると、必ず体重が増えてきます。それは、まず痛みを起こすエネルギーや痛みを耐えるエネルギーが不必要になる上に、気分がよくなると食欲も亢進するからです。)

まだまだありそうですが、これくらいにしておきます。

こうした様々な症状や機能の改善と並行するように、血液検査の数値もどんどん好転していきました。初診時(2001年1月5日)は、以下のとおりでした。

血沈 97 (正常値は12以下)

CRP 4.2 (正常値は0.6以下)

ZTT 14.2 (正常値は12以下)

RF 390 (正常値は15未満)

一ヵ月後(2001年2月7日)には、

血沈が 65

CRP 1.8

RF 376

に減っていました。リバウンドで右膝通に悩まされていたにもかかわらず、上昇したのは

ZTT 15.7

だけでした。その後も数値が増えたのはごくわずかで、順調に下降線をたどっていき、毎月の血液検査がとても楽しみでした。

5月の連休には、車で約2時間かかる実家に行くことが出来ました。体がきつくてここ1・2年はほとんど帰ったことがなかったので、久しぶりに会う母を見て年をとったなと思いました。私が心配ばかりかけているからです。私はすぐに、スマートになった手足を母に見てもらい、松本先生のことや血液検査のことなどを得意になって話しました。母が、私の手をさすりながら何度も繰り返す「よかったな、よかったな。」は、何時しか涙声になっていました。その数日後、母から電話があり、「この前、元気になったあんたを見てから、よう寝れるようになったわ。眠り薬もいらんようになってもたわ。その偉い先生に、うちもえらい喜んで感謝してる、手、合わせてますて、あんじょう言うといてや。」と言います。松本先生に母からのこの言伝を伝えますと、先生は「おう、俺はイエス・キリストか」と言われて、いつものようにニッと微笑まれました。★不治の病とされているリウマチを、治してあげる事によって、リウマチ患者さんの幸せを、これだけ多く増やしていることを、この手記から読み知り、改めて医者になった事を、自ら幸せだと思います。さらに、私の治療法が全世界に広まり、世の中の不幸を幸せにする事に少しでも貢献できれば、かけがえのない独自の人生を送った証となるでしょう。その日は、何時来るのでしょうか？それまで世界のリウマチ患者さんが、絶対にステロイドを使わないように、心から祈るしかありません。ちなみに、この患者さんの服用したステロイドは、たった1錠のリンデロンだけだったようです。(リンデロンは、副腎皮質を抑制する力が強い割には、痛みを取る力が弱いので、減多にリウマチの治療には用いないのが、常識となっていますが。)だからこそ、この方は、このように極めて順調に、リウマチが治っていったのです。くたばれ！ステロイド！治り難いリ

ウマチ患者さんは、ステロイド注射を安易にやられた人です。一本のステロイド注射に含まれているステロイドホルモンは、100%体内の免疫細胞のリセプターと結びつき、簡単に遺伝子に入り込み、正しい遺伝子の働きを抑える事によって、Tリンパ球とBリンパ球の働きを妨害し、さらに抗体のクラススイッチを強く抑制するのみならず、リウマチをアトピーに変えた後の、自然後天的免役寛容をも、起きなくさせてしまっているのです。ところが、全国津々浦々に、ステロイド注射の副作用を、まるで眼中にない整形外科医が、わんさといます。近頃は、アトピーでステロイドを用いるのは、全く意味が無いということを、ほとんどのアトピー患者さんは理解しています。ところが、整形外科医が、リウマチでステロイド注射を用いる怖さに関しては、知らない人が多すぎます。日本人は、もっと薬の怖さを知るべきです。薬は、あくまでも毒である事を認識すべきです。いわば対症療法は、毒(薬)をもって毒(病気)を制しているにすぎないのですから、最期は、二つの毒で、くたばってしまうのです。結局の所、多くの病気の根本治療は、体自らの免疫が、自然に行っているのです。私は、その手伝いをしているだけです。言い換えると、体に入れていいのは、汚染されていない食べ物と飲み物だけで、他は不必要な毒なのです。ただ近頃は、必要な食べ物と飲み物に、汚染化学物質が否が応でも含まれている事が、アトピーの原因でもあり、リウマチの原因になっているのです。勿論、病気を治す薬の為に、新たにリウマチが発症することも、しばしば経験しています。ちなみに別の観点から、何故ステロイドの影響を除去する事が難しいかと言いますと、人間の体はいわば化学工場であり、常に二つの物質が結びついて、化学反応を起こしながら、生命活動を続ける事が可能なのです。人体に絶対に必要な化学反応の中で、最も結びつきが強固であるのは、ステロイドを代表とするホルモンと、ホルモンリセプター(受容体)であります。次に、所謂抗原(アレルゲン)と抗体(IgE抗体)が結びつく、抗原抗体反応であります。3番目が、酵素と基質とが結びつく、酵素反応であります。これらが、人体に欠くべからざる3大化学結合反応と言えます。3つの中のどの一つの結合も不可能になれば、人間は死んでしまいます。つまり、ステロイドホルモンの結合力が、最高である為に、免疫反応を抑制出来るのです。逆に言うと、リセプターと不必要にすでに結びつき過ぎた、ステロイドを切り離す事が、一番難しいと言えます。従って、切り離す時に生じるリバウンドが、どぎつく、しかも、長い時間がかかる理由なのです。この観点から見ても、生死に関わらない時に、ステロイドを投与する事が、如何に罪多い事であるかがお分かりでしょう。★

(4) 卵事件★この事件は、まさに、不必要な化学物質が含まれている卵や、変性した蛋白を含んでいる卵を食べると、この卵がアレルゲンとなり、新たにリウマチを引き起こした意図せざる人体実験であったのです。さらに、卵がアトピーの3大アレルゲンであることは、既に知られている事でありますが、Bリンパ球の抗体のクラススイッチが、完全に行われていない時には、リウマチになる事を示しているのです。ここで、更に付け加えると、何故、卵が赤ちゃんに、アトピーを引き起こし易いのに、リウマチが起こし難いかを、考える必要があります。その答えの一

つは、赤ちゃんは、殺すべき敵と排除すべき敵とを、簡単に見分けて、正しいクラススイッチを行ってアトピーになり、最後は、自然後天的免役寛容になりやすいとだけ、言っておきましょう。逆に言い換えると、赤ちゃんのうちに、同じアレルギーである卵に対して、自然後天的免役寛容を起こしておけば、リウマチになり難いと言えます。★

6月の血液検査の結果は正常値か正常値に近いものとなり、わずか半年でこんなに良くなるなんてと、夢のようでした。★強調しても強調しすぎる事は無いのですが、この方は、ステロイドを1錠だけしか飲まなかったのが、簡単に夢が実現できたのです。12年の苦しい精神的葛藤は、肉体の痛みよりも強かったのですが、断じてステロイドを服用しようとしなかった、断じてステロイドを注射させなかったために、これほど楽にリウマチが改善していったのです。皆さん、ステロイドを簡単に使ってはいけませんよ。★あまりに嬉しかったのでささやかなお祝いをしようと思い、松本医院のすぐ側のデパートに寄ってみました。デパートで自分のための買い物をするなんて、この日より前はいつだったのか、思い出せません。ちょうどバーゲンをしていて大好きなピンクの洋服を買い求め、電車に乗りました。抱えていたデパートの紙袋を濡らすポタポタという音にハッと、あわてて窓の方に目をやると景色がぼやけてよく見えません。ぬぐってもぬぐっても涙が頬をつたい、窓からの景色がはっきり見えることなく、電車を降りました。

ところが、その一ヵ月後の7月10日、大事件が起きました。早朝、右足に異変を感じて目が覚めました。トイレに行こうと起き上がり、立とうとすると突然激痛が襲ってきたのです。12年前の発病時（妊娠3ヶ月）の悪夢の再来でした。右足は浮かしたまま、両手と左足を使って這って動かざるをえません。二階に寝ていたので、階段はおしりを滑らせておりましたが、それが限界でした。身動きできないまま、激痛に耐えるしかありません。お昼過ぎになってようやく痛みが和らぎ、片足（左足）で移動出来るようになりました。時間の都合をつけて主人が、夕方、車で松本先生の所に送ってくれました。待合室で、どうしてこんな事になったのか考えてみると、あれしか思い当たりません。卵10個です。よくスーパーに行ってくれる主人が、安売りをしていたからと、10個入りの卵のパックをふたつも買ってきていました。ひとパックは食べてしまったのですが、もうひとパックは賞味期限が過ぎてしまいました。熱を通せば大丈夫だろうと、10個全部をゆで卵にしてしまいました。賞味期限切れを知っている主人と子供達は、手をつけようとしません。しかたがないので私一人で、8日の夜3個、9日の朝3個、昼2個、夜も2個と、10個とも食べてしまったのです。気持ち悪くて吐きそうになりながらも捨てられず、もったいないの一心がとんだことになってしまいました。馬鹿なことをしたものです。

恥ずかしかったのですが、先生に尋ねますと「考えられることだ。」そして「それを確かめる為に、もう一度やってみたら？」と言われました。私の救世主であり大恩ある松本先生のお役に立てるのなら、どんなこともやらねばと頭ではわかって

いるのですが、あの激痛を再度味わうのは勘弁してほしいと、体と心が訴えます。勇気がなくて検証出来ず、申し訳ありませんでした。すみません。

ちなみに、卵10個の中に含まれていた農薬等の化学物質は、14にまで下がっていた血沈を34に、0, 1だったCRPを3, 7に跳ね上げました。身の危険を察知した免疫システムの細胞たちが、必死になって戦ってくれた証だと思うと、何とも健気で有り難いとおしくさえ感じます。でもあの激痛は、もうこりごりです。

でもそのとき、ふと一つの疑問が浮かびました。あのモーレツな痛みがあったから、私は何か体に異変が起きていると気づいたのです。癌や肝臓病のように、体の内部で静かに侵攻し自覚できる病状として現れた時にはもう手遅れという場合もあります。リウマチの痛みにしろアトピーの湿疹にしろ、体に異変が起こっているという証なのですから、むしろ有り難いことです。(今だからそう思えるのであって、症状のある時には絶対に思えませんでした。) その異変とは、化学物質などの異物・毒物の体内への侵入であり、湿疹や痛みは、それらを一生懸命吐き出していることを教えてくれています。息子が赤ん坊の頃、重症のアトピーで嘆く私に、母は「悪いもんは、どんどん出した方がええんや。体に溜まって癌にでもなったら、えらいこっちゃ。目に見えへん病気より、見える方がええねん。」とよく言って、慰めてくれたものです。もっともその当時の私には慰めになってはいなかったのですが、今となると、学歴のないましてや医学的な知識などあるはずのない母の方が、大学までいかせてもらった私より、よほどエライと感心します。となれば、体に侵入してきた異物・毒物を必死に吐き出してくれている有り難い・正しい免疫の働きを抑制したり止めたりすることによって、体に異変が起こったんだよと教えてくれる信号であり体から悪いものを吐き出した印(跡)にすぎない、見かけの症状を隠してしまう、それでいいのかな、いいはずはないと思ったのです。私も息子も実際そうした治療(これは治療と言えないのではないかと思います。)を受け続け、今なお松本医院以外の全ての病院で行われています。松本先生が、憤りを込めて繰り返し繰り返し力説されている所以だと思いました。

また「目に見えない病気より、見える方がいい。」という母の説にも、しごく納得します。現れている(見える)湿疹や腫れより、感じる(見えない)痒み・痛み・だるさ・苦しさ等の方が人にはわかりにくいものです。同じことが、心の傷と体の傷でもいえると思います。体の外に出来た傷ならば見えるので、すぐに気がついて自分もまわりも何とかしようとしませんが、心の傷(精神的苦痛)は外からは見えませんから、やはり人からはよくわかりません。どんなに苦しんでいるか・どんなに苦しめられているかが、わかってもらえず一人で抱え込み、どうしていいかもわからなくてさらに苦しむ、という経験をされた方も多いのではないのでしょうか。そして見える見えないの区別なく、病気の症状そのものから受ける身体的苦痛と、その病状から発生する精神的苦痛を、もし数値で表わしたなら、イコールではないと思います。精神的苦痛は、身体的苦痛の2倍にも3倍にも感じられました。例えば、1の痒み・痛みがあり、その時の精神的苦痛を1だとします。痒み・痛み(身体的苦痛)が3になった場合、それによる精神的苦痛は、同じ3でしょうか。私には、

2倍の6以上、3倍の9に近いものに思えました。不安・迷い・焦り・憤りや、人の目が気になる・人からの中傷・人間不信・自己嫌悪・自己否定など、挙げればきりが無い程に、精神的苦痛は際限なく広がり深まっていくものだからです。

見える苦痛・見えない苦痛も、身体的苦痛・精神的苦痛も色々と味わってきました。勿論、知らないうちに・気づかぬうちに、私が人に苦痛を与えてしまったことも、数限りなくあると思います。人の痛みのわかる人間になろうなどとは、つゆ程も思いませんが（不可能だと思うからです。）、人が（相手が）どんな気持ちでいるのかを、いつも自分の方から推し測り、寄り添っていくように、耐えず努力し続ける人間でありたいと思っています。難しいですが。★このような文章に対して、私がコメントするすべは、持ち合わせていません。もう全て彼女は、語り尽くしてくれています。にもかかわらず、強い同意を込めてコメントをさせてもらいます。今ほとんど全ての赤ちゃんに、多かれ少なかれ、アトピーが見られます。卵が一番大きなアレルゲンとなっています。これは当然の事なのです。人間の血中には、アルブミンとグロブリンという蛋白が、見られます。実は、アルブミンというのは、卵の白身を意味する言葉だったのです。アルブミンの仕事の一つは、様々の物質を結び付けて、運搬することです。このアルブミンに、化学物質がひっついてアレルゲンとなるのです。しかしこの方は、12年もの間、痛み止めの抗炎症剤や抗リウマチ薬を飲み続けてこられたので、普通ならばこのようないわば賞味期限を過ぎた卵を食べると、アトピーが出るはずなのに、リウマチに出てしまったということになります。つまりこれは、まさにリウマチもアトピーも、同じ原因で生じ、結局は、同じ病気である事を物語っているのです。私は冗談交じりに、「もう一度食べたら。」と言ったのですが、本当は絶対やって欲しかったのです。というのは、私の理論をこの方を通じて、実際にもう一度再現したかったのです。《これも私の好きな冗談が、少し入っていますが。》勿論、このエピソードを、このように解釈出来ることを許されるのは、世界で私一人だけです。ちなみに、今この実験をすれば、この人はすでに、抗体のクラススイッチをしてアトピーが出てしまった人なので、今同じ実験をすれば、リウマチよりもむしろ、アトピーが出るはずです。★

(5) アトピーの出現★すべてのリウマチ患者さんに、必ずIgG抗体がクラススイッチして、IgE抗体に変わるBリンパ球が出現しだすと、徐々にアトピーが出だします。激しく出れば出るほど、痛みが痒みに変わるわけです。私がこの事実に気がついた時、造化の神の素晴らしさに驚嘆したものです。関節から出せない異物を、皮膚から出すという離れ業が、免疫の働きの中に隠されていたからです。しっかりと私のリウマチ根治の理論を読んで下さい。★

2001年夏になりました。あの卵事件は1日だけで終息し（血沈だけは、正常値に戻るのに4ヶ月余りを要しました。）とても体調のいい状態が続いていました。織田先生が、治療中私のお灸の後を見ながら「よくなってきたら、こんな熱いお灸をようやってたなと思うよ。」といわれた事がありました。本当にそうでした。熱さはあまり感じず据えた後の心身の爽快感が嬉しかったのに、この頃それが逆転してきたのです。お灸を据えることの気持ちよさよりも、熱さやお灸跡の痒みによる不快感の方が、上まわるようになってきました。それは織田先生の言われるとおり、リウマチが着実に快方に向かっているということなのです。★お灸をする意味は、すでに書きましたが、次のような言い方も出来ます。いわば、お灸をすることで、まず、皮膚の蛋白を変性させます。その焦げた皮膚の蛋白を、免疫に、新たに異物と認識させ、関節の敵から皮膚に向かわせる陽動作戦であります。と同時に、症状を痛みから熱さに変えると言えます。鍼については、炎症の痛みを、刺す痛みに変え、免疫を高めていると言えます。私に言わせると、鍼灸が、魔法の力を持っているわけではないのです。ところが、リウマチの痛みが減っていくにつれて、このような陽動作戦の必要性が無くなって来ます。ということは、体で抗体にクラススイッチが始まり、リウマチが良くなっていく事が、自然に分かるわけです。それと共に、血液検査においても、全ての値が改善していくのです。私の治療は、根本治療でありますから、当然のことなのです。★

そしてついに、アトピーが現れました。松本先生の理論・治療法の正しさ・確かさを、他の多くの患者さんと同じように私の身体も証明しました。松本先生も織田先生も看護婦さんも、異口同音に「よかったね。」と言って下さいます。いよいよリウマチ完治への最終章、最後のハードルだからです。しかし、私の心中は複雑でした。リウマチ完治への最終段階に入ったことは、勿論嬉しいことですが、アトピーは、重症のアトピーだった息子の幼い頃のつらい日々を、私の心の奥から引きずり出すのです。でも、そんな私の気持ちなどに何の容赦もなく、アトピーは勢いよく私の両手足に拡がっていきました。松本先生から、漢方煎剤を入れたお風呂に入ることと、ホームページのアトピーの所をよく読む様指示されました。そして「何かあったら、ここに電話しなさい。自宅の電話番号や。」と言われ、メモを手渡して下さいました。そこには一度もかける必要が無かったし、これからもないと思いますが、そのメモは、今もそしてこれからも、私の大切な大切な宝物です。★アトピーしろリウマチしろ、どれだけリバウンドが出るかは、分かりません。とりわけ、過去の一時期にしろ、セレスタミン・プレドニン・リンデロンなどのステロイドを服用してきた人。また、ステロイドの注射をしてきた人。さらに大量にステロイドを一時期にしろ塗ってきた人。さらに、花粉症で、一時的に症状を良くする、免疫抑制剤を色々使われてきた人。この人達は、まず、ほとんどがステロイドを使ってきたことを正確に覚えていません。というのも、日本中の医者で、堂々とステロイドを使いますと公言出来る医者は、皆無だからです。私以外の全ての医者が、アトピーもリウマチも、治す事が出来ないわけですから、何れ副作用が問題になると言う事を、重々知った上で、後ろめたさを感じながら、仕方なしに使っているからです。この意味で私は、リバウンドが酷くなりそうな人に対しては、密かに私の自宅の電話番号を教える事があります。勿論時には、酷くなりそうでない人でも、恐ろ

しいリバウンドを経験する人もいますが。正確には、どれだけリバウンドが出るのかは、やってみなければ分かりません。いずれにしろ、どんなにリバウンドがひどくても、リウマチそのもので死ぬ事はありません。しかし、リウマチがクラススイッチをしてアトピーに変わった時に、アトピーの激しいリバウンドで、理論的には、死ぬ事もあり得るのです。それは、感染症のためです。アトピーの治療は、初めから終わりまで、如何に黄色ブドウ球菌感染症とヘルペスウイルス感染症にならないかが、一番大切なのです。言うまでもなく、私のアトピーの治療で、取り返しのつかなかった事は、一度もありませんが。★

2001年の春、息子の喘息を松本先生に診て頂くようになったのを機に、「松本医院」のホームページを全てプリントアウトしました。穴を開けてファイルに閉じていくと、分厚いファイルが3冊出来ました。とにかく膨大な量で、紙もインクもファイルも足りなくなり、何度も買いに走ったものです。穴を開けてファイルに閉じる作業も大変で、子供達に手伝ってもらいやっと出来上がりました。読むためにした作業ですのにその作業に疲れてしまい、申し訳ないことに出来上がってからはアトピーの出現まで、開くことは一度もありませんでした。そのファイルを取り出し、「革命的アトピー(アレルギー)の根本治療法」を読ませて頂いたときのショックを、何と表現したらいいのでしょうか。晴天の霹靂でしょうか。まさに『革命的』であり『コペルニクス的転回』の連続に、何度「エーッ！」と驚きの声を発したでしょう。とくに箇条書きされた「私の治療法や考え方が革命的である理由」には言葉を失いました。その中でも、

2、痒いときに掻いてはいけないのが現在のアレルギー学会の考え方ですが、掻きたければ掻けば良いという事を証明したこと。★宇宙がビッグバンによって生じてから、140億年。生命が誕生して38億年。進化を繰り返し、現生人類が誕生して600万年。つまり人間の頭脳が出来上がったのは、たった600万年に過ぎません。ところが、免疫が出来始めたのは、生命が出来上がった時ですから、38億年もの間、営々と免疫の進化があったわけです。一方、600万年の短い期間に、少しばかり進化した人間の頭脳は、38億年という、いわば無限の年月に耐え抜いてきた、ほとんど完全ともいえる免疫の進化を、残念ながら理解できないのです。この厳粛な事実を、他の全ての医者は気がついていません。にもかかわらず、完璧な免疫の働きの結果生じたアレルギーを、病気だと言い続けています。アレルギーの生じるほとんど全てのプロセスが、理解されているにもかかわらず、最終段階の炎症の症状だけを病気だと言い切る、アレルギー学会のお偉方をはじめとする全ての医学者や医者には、辟易します。

このような考え方は、如何に愚かで間違っているかを、次のような例え話で、証明する事が出来ます。細菌やウイルスが体内に侵入した時に、それを殺す為に様々な免疫が発動され、最後はとっておきの武器であるIgG抗体を作って、闘いが終わります。その際、いわゆる感染症による、痛み、発熱、発赤、腫れ、機能障害などの人間にとって極めて都合の悪い症状を伴います。これを炎症の5大症状といいます。ところが、この五つの症状が、人間に都合が悪いからと言って、この免疫の働

きを非難することは、断じてないのです。にもかかわらず、現代文明が作り出した、人間にとって不都合な異物であり、無生物である化学物質を排除する為に、IgE抗体を用いた時に生じる症状である、アトピーや花粉症、喘息、結膜炎などの症状だけを、何故否定するのでしょうか？このような考え方に、一体、どんな正しい論理があるのでしょうか。完全に間違った論理なのです。ただ、IgE抗体と結びついている敵が、人間の英知が作り出した、化学物質であることを、どうしても認めたくない為なのです。つまり、人間だけが作る事を許された文明を、否定したくないのです。

細菌を殺すIgG抗体を用いる免疫と同じく、精巧極まりないIgE抗体を用いるアレルギーの免疫の働きを、人体の免疫は、無意味にも今も残しておくのでしょうか？例えば、類人猿は、不必要になったしっぽを、樹上生活をしていた数百万年前に欠落させていたのです。その後、人類は類人猿の毛皮も消滅させました。つまり、進化とは、不必要なものを退化させ、必要なものを益々精巧に、かつ精妙に、かつ複雑に、作り上げていったのです。無脊椎動物は、抗体を作る事は出来ないのです。ただ、脊椎動物だけが、抗体を作る事が可能になったのです。進化し続けて、これらの抗体が作り出されるようになるのにも、何億年もの年月がかかっているのです。その結果必要だからこそ、IgE抗体も、作られたのです。まさに、アレルギーの免疫は、進化の素晴らしい最終ゴールの一つなのです。にもかかわらず、愚かな医者たちが、アレルギーを悪者扱いをしているのを、全く理解出来ません。痒みも必要だからこそ、免疫は、38億年の進化の所産として残しておいたのです。まさに痒みを搔く事によって、異物を体内から体外へ、搔き破り捨てさせるのです。こんな簡単な意味を理解出来ない医者が、果たして科学者の風上にいてもいいのでしょうか？睡眠中さえ本能を乗り越えて、免疫の命令により搔き続け、体内から異物を排除しようとする高貴な戦いを、誰が否定する権利があるのでしょうか？進化の意味を全く理解できない人だけに許された愚行です。★

3、食事制限は一切する必要は無いことを証明したこと★赤ちゃんが最初に出会うアレルゲンは、否が応でも食べなくてはならない食べ物にひっついていて農薬、保存剤、抗生物質、そのほかのあらゆる食品添加剤の化学物質、つまり異物であり、これらがアレルゲンになるのです。従ってこれらの化学物質で味付けされたたべものを食べない限りは、絶対にアトピーは起こらないのです。しかし、生きるためには、食べなければならないのです。全ての飲食物には化学物質が混入していますから、数品目の食事制限をしても、必ず他の食品から入ってくる化学物質に対して、必ずアトピーを起こしてしまうのです。つまり、食事制限の意味は全くないのです。実は、私の理論というのは、極めて自然に生まれたものなのです。とにかく餓死しないためには、例えアトピーが出ていても、食べ続けなければなりません。ところが、何時までもアトピーが出続けるものでない事を、そのうちに知るようになったわけです。つまり事実として、先に自然後天的免役寛容を見つけたのです。その意味付けをやったのが、私の理論なのです。何も私は、朝から晩まで、どうしたらアトピーが治せるのかを考えただけではありません。ただステロイドは、何の意味も

ない薬だという事を確信しながら、日々、臨床の中から学び取った免疫の事実を、最新の免疫学と結び付けて打ち立てた理論が、自然後天的免疫寛容なのです。★

には、打ちのめされてしまいました。手記や松本先生のコメントから、何となくそうかなとは思っていましたが、はっきり目の前に突きつけられて息が詰まり、身動きできない程でした。

妊娠3ヶ月でリウマチを発病し、生まれた息子は、一月もしないうちに重症のアトピーになりました。★リウマチの患者さんの子供さんが、重症のアトピーになるのは、極めて自然なことです。異物を認識する優れた能力が、子供さんに伝わるのは、当たり前のことです。とくに母親の資質は、男の子供さんに伝わる度合いが多いものです。男性を決める性染色体である、XYの、Yは、極めて小さいyであり、男性の生殖器を決めるだけの仕事しかしていないのです。残りの大きいXに、様々の遺伝的特性が、女性である母親から伝わっているのです。この症状が出始めた頃に、私との出会いがあれば、これ程苦しむ必要はなかったのです。普通のアトピーの赤ちゃんで、一切現代医学の治療をされないで私の治療を受ければ、平均5～6ヶ月で、食べ物に対して、自然後天的免疫寛容が起こります。食べ物から侵入する化学物質を出す為の皮膚の傷が、なくなれば、その傷から侵入する、ハウスダストやダニが運ぶ化学物質に対するアレルギーは、起こり難くなります。その結果、食べ物に対する自然後天的免疫寛容が起これば、アトピーの症状は、極端に軽くなるのです。しかし、アレルギーの特に強い赤ちゃんでは、自然後天的免疫寛容が生じるのに、時に1年以上かかることがあります。★御多分に漏れずあちこちの病院を訪ね歩きましたが、一向に良くなりず、それどころか益々酷くなり顔一面火傷を負ったように真っ赤にただれてしまいました。掻きむしっては泣き、一日中少しも眠りません。ずーっと抱っこしてはなくては何りませんでした。掻くと余計に赤くただれて血や汁が出るし、やっと張り付いたかさぶたも剥がれ落ち、そこからまた血が出ます。いつも両手をガーゼで作った手袋で覆い、腕を押さえつけるようにして抱きかかえていました。しかし自分で歩くようになれば、そんなことは出来ません。息子が掻きむしっていないかいつも監視していて、叱りつけてばかりいました。息子は、たえず私の顔色を伺いおどおどとしています。こんな私でも、たまには笑ったのでしょうか、それを覚えていたのか息子が、例によって激しく怒る私に「お母さん、笑って！」とたどたどしく言ったことがありました。★この赤ちゃんは、かなり重症の、強いアレルギーを持っていたように思われます。★2歳だったのでしょうか、ある時、息子が狂ったように掻きむしっています。あわてて息子の所にとんで行き、手を押さえて掻かないようにし叱りつけました。でもこの時息子は物凄い力で私の手を振り払い、いっそう激しく掻きむしったのです。掻きむしった所から出た血を見た瞬間、私は息子に手を挙げていました。息子の大きな泣き声にハッとして、我に返りました。掻けばアトピーが悪くなると思い込み、息子にどれ程酷い仕打ちをしてきたことでしょうか。今わが身にアトピーが出現し、あまりの痒さに我を忘れて掻きむしった時、あの頃の息子の苦しみ・叫びが・・・・・・・・・・肺腑を抉る自責の念が絞り出す涙は、血色のように思いました。★このような思いがけない仕打ちを子供に与えたのも、何もお母さんが悪いわけではありません。全ての医者が、

愚かにも搔いてはいけないなどと、間違ったアドバイスをするものですから、よくしてあげたいと思っているお母さんが、思わず子供のためにしてあげたことなのです。責任を持つべきは、やはり医者なのです。医療界なのです。このような医者は、赤ちゃんが、寝ながらも掻きまくっている事実を、知らないのだとすれば、やぶ医者の極みです。★

また、息子が4ヶ月になろうとしている頃から、民間療法を始めました。母乳だけで育てるという趣旨のところで、乳房のマッサージをしてもらいました。そして、ここでは自然食品など食べ物に大変こだわりがあり、アトピー改善のため厳しい食事制限をしていたのです。真っ赤な息子の顔を見て、「全部抜いたところから、始めよう。」と言われました。蛋白質を多く含む食品はもちろん、この子はお米にもアレルギーがあるからと、粟・稗・キビの雑穀と野菜だけ（果物もダメ）、味付けも塩のみという食事となりました。毎日、何を食べたのかノートにつけ、そこの先生に見てもらうのです。粟・稗に菜っ葉を食べるわが姿に、幼い頃兄が飼っていた小鳥や鳩を思い浮かべました。こんな食事をしていても、息子のアトピーは少しもよくなりません。この厳しい食事制限をしながらの生活は、大変なストレスとなり、拒食症・過食症に似た状態に陥りました。私は、そこの先生から食べてもいいと言われたものしか食べることができません。主人や長女・次女の普通の食事作りそれを食べているそばで、私は私の食事をします。でも、OKの出ていない食品を食べようとは決して思いませんでした。というより、ただでさえ酷い息子のアトピーが、私のせいでさらに悪くなるかもしれないと思うと恐ろしくて、とても食べるなんて出来ません。体重がどんどん落ちやつれてきて、主人や母、周りの人が心配して色々言ってくれても、全く受け付けなくなっていました。その反動で、OKの出ているものは、吐きそうになるまで食べるのです。あの雑穀のご飯でさえ山盛り食べ、甘味のあるサツマイモやカボチャは、鍋一杯をたいらげていました。またお菓子などの嗜好品に飢えていたので、そこで売られていた雑穀で作られたお煎餅を大量に買い込み、それがなくなるまで食べるのを止められないのでした。一体私は、何をしていたのでしょうか。しかしながら、ここの先生にはものすごく感謝しています。ステロイドの恐ろしさを教えてくれたからです。★ステロイドの恐ろしさを教えてくれても、食事制限による栄養不良の問題や、食事制限をすることによって、どのようにアトピーが治るのかとか、何時、何故、どのように食事制限が解除されるのかについて、何も教えていない所が、大問題なのです。さらに昔食べてきた食事が、何故悪いのかについても説明がありません。★あの食事にしても、ほとんどの野菜に甘味があることを初めて知り、野菜が本来持っている自然のほのかな甘味がとてもいとおしく感じられました。なかなかそういう経験は出来ないものだし（もう一度したいとは思いませんが）、実際拒食・過食をしなければ、あれはあれで健康食ではなかったかと思っています。それにそこに行けば、息子よりはましかれどきついアトピーの子のお母さん達がいて、色々話が出来たのは精神的に大変メリットでした。

ただ、私が人間として余りにも未熟だったあの頃、息子に犯してしまった罪（一時期とはいえ息子の誕生・存在を肯定できなかつたこと・息子の心をひどく傷つけ

たこと)は、決して許されるものではないし、私が、私の生涯を通して許してはいけないのだと思っています。私が、自ら心の奥深くにまで打ちつけておかねばならぬ楔です。この十字架を、私は死ぬまで、背負っていかねばならないのではなく、背負って生きたいと思っています。★いわば子供に良かれと思った事を、医者にそそのかされてやっただけのことであり、ましてや、素晴らしい優秀な免疫系を持って生まれた子供を、医者が病気だと間違っただけで宣告したために生じた感情ですから、何も自責の念を感じる必要はないのです。★

私のアトピーは両手足にでてきましたが、それ以上は拡がりませんでした。お風呂に入れる漢方薬を頂き、看護婦さんから指導して頂いたとおり、その漢方煎剤をお風呂に入れ毎日1時間以上入るようにしました。漢方風呂はとても気持ちのいいもので、漢方風呂に浸かってしばらくは、思いっきり掻きまくりました。(10年前に知っていれば・・・) そうすると落ちついて来るのですが、1時間は結構長いものです。ボーっとしているのももったいないし、リウマチに水泳がいいと聞いたことがあったので、リハビリをすることにしました。漢方風呂の中で、首、肩、肘、手首、腰、膝、足首を、曲げたり伸ばしたり回したりしていますと、面白い程よく動くようになりました。嬉しくて、織田先生に治療してもらう度に「こんなのが出来るようになりました、これも出来るんです。」などと、やってみたものです。織田先生は「すごい、すごい！」と褒めて下さった後で、「張り切りすぎて、怪我をしないでね。心配だわ。」と言われました。それくらい漢方風呂は、アトピーにもリウマチにも効果抜群なのです。

ところが、ちょっとしたハプニングが起きました。目やにが出てきたのです。朝起きた時目が開けにくいくらいになり、松本先生に、医院への電話でお伺いすると、「結膜炎だから、すぐに目薬を取りに来なさい。」と言って頂きました。

私は改めて、松本先生は信頼できる素晴らしい先生だと思いました。アレルギーのことは、全て・何もかも、先生にお任せです。勿論結膜炎は、目薬をさして1週間もすると、すっかりよくなりました。★勿論この結膜炎は、感染性の結膜炎であったので、点眼薬を出したのです。アレルギー性の結膜炎の場合は、漢方で、簡単に症状が取れます。アレルギー性の結膜炎の場合は、絶対に点眼薬を使ってはいけません。これらの点眼薬には、必ず、ステロイドか抗アレルギー剤か、抗ヒスタミン剤が入っていますから、使ってはいけないのです。勿論、同時に起こっている事がありますが、この場合は、感染性の結膜炎であったので、一週間で良くなったのです。ちなみに、風邪薬にも、抗ヒスタミン剤や、抗アレルギー剤などが入っていますので、アレルギーの人が飲めば、必ず、風邪が治った後、アレルギーのリバウンド症状が出る上に、何時までも自然後天的免疫寛容が、起こらないので、飲んではいけないのです。よく風邪をひく子供が、アレルギーが完治しないのは、このためなのです。知っておいて下さい。★

思い返せば、私は赤ん坊の頃から松本先生にお会いするまでずーっと、立派なアレルギー人間でした。

私のアレルギー年表

年齢	アレルギー	治療等
0歳～1歳	アトピー（昔、田舎では胎毒といわれた）	薬はなかった。（母の苦労話をよく聞かされた。）
中学生の時	漆にかぶれた	医者に行く。 薬をもらったかどうかは忘れた
大学生～ 26歳くらい	ニキビ（顔）	特別な化粧品を使っていた。
高校生から 45歳	鼻炎	特になし
33歳～ 45歳	リウマチ	西洋医学の病院 抗リウマチ剤・鎮痛剤
43歳の夏 （4ヶ月間）	首・胸に酷いあせも	市民病院 塗り薬（ステロイド入り） 顔に出てきた時、少しだけ使った。 飲み薬 抗アレルギー剤
44歳の春 （3ヶ月間）	風邪から喘息に	西洋医学の開業医 抗生物質・抗アレルギー剤

こうして見ると私は、世間を賑わせた言い方を借りれば「アレルギーのデパートどころか、アレルギーの総合商社」です。その中でも松本先生に診て頂く2年前のあせも（アトピー）と、1年前の喘息の時に注目すると、抗リウマチ剤を飲んでい
る上に抗アレルギー剤をかなり服用し（医師には大丈夫だと言われました。）、ダ
ブルで免疫機能を抑制していたこととなります。アトピーを抑え、喘息も閉じ込め、

その為にリウマチを悪化させたのでしょう。松本先生がして下さっていることの、全く逆を体験していたことになります。愚かなる事この上ありません。★近頃の若い人達が、リウマチになる一番大きな原因は、長期に渡って、花粉症で、現代西洋医学の治療を受けた為です。いわゆる I 型のアレルギーである花粉症で、長期にセレスタミンというステロイドを、耳鼻科で飲まされたり、また花粉のシーズンごとにステロイド注射を何回もやったために、「いわゆる抗体の逆クラススイッチ」が起こって、リウマチになる人が多くなりました。

クラススイッチというのは、リウマチで用いられる IgG 抗体が、アレルギーの抗体である IgE 抗体に、自然に作り変えられることです。何回も繰り返しますが、IgG 抗体の本来の仕事は、体内に侵入してきた命を脅かす生物を殺す事です。これは単純に、人体で生物がはびこるのを恐れるのみならず、その生物が作り出した、人体に有害な無生物である異物を作り出させないためにも、殺さなければならないのです。（人体が作り出すものは、胎児以外は、全て無生物なのです。）さらに、そのような無生物である異物は、血管の中に蓄積され始めると、免疫は、無生物である異物を排除する時にのみ用いられる IgE 抗体を、作り出すのです。激しいアレルギー反応を起こし、血管を虚脱させ、血圧を急激に降下させ、ショック状態を起こす事を、防ぐ為でもあるのです。本来、IgE 抗体の活躍する場所は、血管外なのです。何故ならば、血管の中でアレルギー反応を起こすと、上に述べたように、確実にショックを起こしたりするからです。だからこそ、ショックを起こす化学物質であるヒスタミンやブラジキニンなどのアミン類や、ロイコトリエンやプロストグランジンなど脂肪酸などを作り出す肥満細胞は、血管内にはないのです。しかしながら、無生物である薬剤などの異物を、注射で大量に血管内に注入したり、気管から大量に吸入したり、腸管から大量に吸収したりした場合に、いわゆるアナフラキシーショックを起こす事が、極めてまれに見られます。

ところで、人体に有害な出来事とは、何でしょう。答えの一例を述べておきましょう。人体は、極めて複雑で精密な化学工場と言えます。生命を維持し続ける為には、この化学工場の化学反応を順序良く連続的に起こさせ、常に正しく稼働させなくてはなりません。一方、生体内のほとんど全ての化学反応（代謝）は、すばやく反応を起こさせる為に、酵素という蛋白質が必要なのです。この蛋白質を触媒と言います。この触媒である蛋白質と結びついた反応物質を、基質と言います。酵素と基質の反応を、酵素反応と言います。ところが、外から侵入した異物である蛋白質は、この酵素反応を妨害することがあるのです。この時、様々な病気が生じます。つまり異物としての蛋白質の中には、間違った触媒となって、この酵素反応を止める可能性があるのです。これらの見慣れない蛋白質（異物）を、免疫反応を使って排除するのです。排除しなければ生命活動が出来なくなるので、まず、免疫反応を、酵素反応よりも早く起こさせる為に、免疫反応の結合力の方が、酵素反応の結合力よりも、強くなっているのです。さらに妊娠中に、胎盤で大量のステロイドを作るのは、アレルギーの免疫反応が胎児に及ばない様に、一時的に免疫反応を止める必要があります。従って、ステロイドの効果を高める為に、ステロイドホルモン反応の結合力の方が、免疫反応の結合力よりも強くなっているのです。

さて、人体の免疫の司令官であるTリンパ球が、異物を関節で殺す事が出来ないと判断した後、Tリンパ球の命令により、Bリンパ球がIgE抗体を作り無生物の異物と結びついて、無生物の異物を皮膚から排除します。最後には、自然後天的免疫寛容を起こして、命に別条がないと判断し、その異物と共存出来るのです。これこそが、リウマチがアトピーに変わるメカニズムであるのです。この理論を見つけ出し、リウマチを含むアレルギーの全てを治せるのも、世界で、私ただ一人であるわけですから、従って、他の耳鼻科医や皮膚科医が、やたらにステロイドを使って、見掛けだけの症状を抑えにかかるとは、仕方のない事なのです。ましてやその結果、彼らが、IgE抗体を元のIgG抗体に戻して（これを、私は、抗体の逆クラススイッチと呼んでいます。）、リウマチを作ってしまう事など、露程も知らないのは、至極当然なのです。ここでも大声で叫びたいのです。「ステロイドは、絶対使うな。」と。クラススイッチというのも、実は、自然クラススイッチというべきものであります。リウマチの免疫を抑制しない限りは、Bリンパ球は、自分の免疫の遺伝子の一部を削除する事で、IgG抗体からIgE抗体へと作り変えて、リウマチをアトピーに自然に変えるシステムを、内蔵しているのです。何故このような面倒なシステムを免疫は、生まれつき持っているのでしょうか？侵入してきた異物が、生物か無生物かが、最初は判断できないので、まず、自分を殺す生物の異物だと見なします。すると、殺戮兵器であるIgG抗体を作ります。ところが、殺しきれない無生物の化学物質であると気がついた時に、初めて、アレルギーとして排除するために、IgE抗体を作るのです。従って、IgG抗体を作るのを、過剰反応と言うべきものなのです。徐々に過剰反応したことに気がついた時に、初めてIgE抗体を作って、処理出来ない化学物質を皮膚から出すのです。これをアトピーと言います。従って、私のリウマチの治療は、単に自然な人体の免疫の働きを、回復してあげる事だけなのです。医者も患者も、アトピーを過剰反応として毛嫌いしますが、これを正常な免疫の働きと言わずして、他に言いようがあるのでしょうか？本当の過剰反応は、初めからIgE抗体を作らないで、IgG抗体を作る事だと言うべきです。従って、人体に害を与える免疫反応という、現代医学のアレルギーの定義は、間違いである事が分かります。

ちなみに、セレスタミンという薬は、ステロイドのリンデロンと、抗ヒスタミン剤のポララミンという薬が、合わさったものです。実は、核兵器であるステロイドと、通常爆弾である抗ヒスタミン剤を、合わせて一つにするには、何の根拠もないのです。というのは、ステロイドのリンデロンは、いわば全ての免疫反応と全ての炎症反応を、抑えきると言っても過言ではないのです。一方、抗ヒスタミン剤のポララミンは、マレイン酸クロルフェニラミンと言われるものです。痒みを引き起こすヒスタミンと同じアミン類に属します。つまりポララミンもヒスタミンの両者とも、同じ痒みを起こす受容体に付着する事が出来る性質を持っているのです。大量のポララミンを投与すると、ヒスタミンが付着する前に、先に、このポララミンが、痒みを起こす受容体にひっついてしまいます。その結果、ヒスタミンが付着出来ず、一時的に、痒みが止まるだけなのです。従って、ステロイドが、抗ヒスタミン剤よりも、比較にならないほど圧倒的に、強力な免疫抑制力を有しています。つまり、核兵器を使う時に、通常爆弾を用いる愚かな戦術家はいないはずですから、それ

なのに、何故合剤にしたのかというと、患者に薬の内容を聞かれた時に、痒み止めの抗ヒスタミン剤と言い逃れする為だと、思われます。許し難いことです。★

(6) 息子のアレルギー

毎晩私にお灸をしてくれた息子も、小学6年生になる春休み(2001年3月末)から松本先生に診て頂いています。アトピーはほとんど分からないくらいになっていましたが、小学校に入った頃から、風邪をひくと必ずと言っていいほど喘息になり、テオドール(気管支拡張剤・抗アレルギー剤)が欠かせなくなっていました。★酷いアトピーを、大量のステロイド軟膏を使用して、皮膚から異物が出ないようにしてしまったのですが、何もアレルギー自体が治ったわけではないのです。一方、大気中には、無限の汚染化学物質が飛散し、気管支の粘膜や鼻の粘膜に、付着します。今度は、体中を循環しているIgE抗体は、仕方なく、これらの汚染化学物質を、粘膜から排除する仕事に変えると、花粉症や喘息が起こるのです。実は、アトピーの炎症で、死ぬ事はないのです。一方喘息は、どんな人でも、6分以上も発作が続けば、必ず死にますから、重篤度は、アトピーの方がはるかに軽度なのです。アトピーの間に、アレルギーを完治しておけば、喘息も起こりにくくなるのです。というのは、子供が最初に出会うアレルゲンは、母乳に含まれる農薬をはじめとする、あらゆる化学物質です。食べ物から入ってきたこれらの異物を、まずアトピーで、皮膚から排除します。この時に出し切らないで、間違った免疫抑制剤を用いると、いわゆるあらゆるアレルギーが出現し、それだけ完治が困難になるのです。アトピーを完治すれば、他のアレルギーは極めて起こりにくくなるのです。赤ちゃんの間に、完治しておきましょう。松本医院で!!★普段も鼻炎で、よくくしゃみをし、またいつも鼻を詰まらせていて「ゴー、ガオー」とすごい鼾をかいて寝ていました。私は息子に「松本先生のお薬はものすごい苦いけど、それを飲んだら絶対治るよ。何でも食べられるようになるよ。」と言いました。私がどんどん元気になっていくのを、一番よく知っている息子は、自分も松本先生に診て頂き漢方煎剤を飲む事をすぐに承諾しました。そして「給食を食べたい。」と言うのです。幼稚園や学校にお弁当を持っていき、皆が給食を食べる中で息子だけが弁当でした。給食を一度も食べたことのない息子のこの言葉に、私は胸を抉られるような痛みを覚えました。

息子とふたりで、松本先生を訪ねたあの暖かい春の日、私はすごく嬉しくてウキウキしているのを、何だか不思議で可笑しく思ったものです。これまで病院や医者に行く時に、嬉しいなんてことがあったでしょうか。★元来、病院というのは、病気を治す施設であったはずですが。ところが実際は、現代の大病院はもとより全ての医院は、一番よく見られるアレルギーの全てを治すことが出来ないばかりか、リウ

マチも治す事が出来ません。それどころか、ステロイドを始めとする免疫抑制剤のために、副作用でさらに病気が深刻になるばかりです。これは、何も病院だけではありません。例えば、勉強が出来る学校ほど楽しい所は無いはずなのに、子供たちは、果たして嬉々として学校へ通っているのでしょうか？学校は、子供に知る事の喜びを伝授してくれる場所になっているのでしょうか？近頃、大人の自殺が増えています。職を失ったからとか、事業に失敗したからとって、死ぬ事の方が、生き続けることよりも大切なのでしょうか？人生という社会は、もっと素晴らしいものがあるはずですが、誰も教えてくれません。つまり、それぞれの場で、全ての人が、持ち場持ち場で、一人一人責任を果たすだけで、このような悲しみは減ってしまうのではないのでしょうか？★

その夜から早速、松本先生に頂いた漢方煎剤を息子に飲ませました。2・3日経った夜、いつものようにお灸をしてくれた後、息子は先にベッドに行きました。用があって2階の息子の部屋の前を通った時、おやっと思いました。静かなのです。ドアを閉めていても廊下を隔てた隣の部屋まで聞こえていたあの「ゴー、ガォー」というものすごいびきが、聞こえません。息子をのぞいて見ると、「スー、スー」という穏やかな寝息なのです。私はビックリして、大喜びで娘たちを呼びました。娘たちとの歓喜の拍手の中でも、息子は「スー、スー」と眠っていました。「松本ミラクル」を、まざまざと見せつけられました。★鼻炎のために、空気の通りが閉ざされていびきが生じるのですが、私の漢方で簡単に症状はなくなってしまいます。こんな簡単に、鼻炎、つまり花粉症などの症状が除去されるのに、ステロイドの筋肉注射を打って、ますますIgE抗体を増やし続け、他のアレルギーも出現させ、挙句の果てはリウマチになる人も増えてきています。にもかかわらず、そのようなインチキをやり続ける耳鼻科が一番流行るという皮肉は、一体誰が責任を持てばいいのでしょうか？厚労省でしょうか？ステロイドは、生死を分かつ時だけ、仕方なく使うことは許されますが、他の場合は、絶対に使ってはならないのです。使うことによって、完治出来る病気までが治らなくなってしまいますのです。分けのわからない症状をもった患者さんの多くが、何らかの形でステロイドを投与されている事が、治療中にわかる事が、しばしばあります。全ての病気の症状は、ステロイドさえ投与すれば、一時的には必ず良くなりますから、何でもステロイドという風潮が、医者の中に、はびこっています。知らないのは、患者さんだけです。皮肉な言い方をすれば、あらゆる病気の中で、一番治療が困難なのは、ステロイドを注射されてきた人です。ステロイドの注射は、絶対してはいけません。★

また一ヵ月後ぐらいだったでしょうか、息子は風邪をひき、夜にはしんどいと言ってベッドで苦しそうにしています。「ヒューヒュー」と喘息の音も漏れていました。私は、出来ていた翌朝の分の漢方煎剤を飲ませました。しばらくすると、まともや不思議なことに息子は「スー、スー」と寝息をたてています。朝は、何事もなかったようにケロッとして起きてきました。「松本ミラクル」万歳です。★初期の喘息も、私の漢方で、極めて簡単に症状が消失し、完治します。しかし、長期に渡って免疫抑制剤（この中には、ステロイド、免疫調整剤、抗炎症剤、抗アレルギー剤、抗ヒスタミン剤など、一時的に症状が良くなる薬は、全てそうであります。）

などを使用してこられた人は、それだけ時間がかかります。とりわけアレルギーの中で、喘息だけが生死にかかわりますから、慎重にステロイドを抜かなくてはならないのです。ましてや、ステロイド注射をされたり、ステロイドのプレドニン・リンデロン・セレスタミン・プレドニゾロンを、大量に、長期に服用してこられた人は、まずステロイドを抜くことが大変です。というのは、人間が合成したステロイドは、患者の副腎皮質の働きを抑制していますから、すぐに止めることが出来ないのです。自分勝手に止めたりすると、ショック死することがあります。さらに、リバウンド現象が重なり、新たなるわけの分からぬ病気が出現する上に、元の病気さえ治るのに長い時間がかかります。このように、ステロイドの影響を抜き去る仕事が、非常に困難になることがしばしばあります。言い換えると、私の仕事の全てが、他の医者が投与したステロイドの影響を除去する事であり、そのために、日夜奮闘していると言っても言い過ぎではないのです。ステロイドの副作用を前もって言わなければ、使えないという法律があれば、私の仕事は激減するでしょうが。★

これが、息子の喘息発作の最後となりました。あれ以来、風邪をひいても喘息が出ることはありません。また、残念ながら給食を食べることは出来ませんでした。随分色々なものが食べられるようになりました。卵やミルクの入っている食品（パンやお菓子）を多めに食べてしまった時も、気分が悪くなり顔に少しブツブツが出る程度で治まるようになりました。以前は、ひどい喘息の発作を起こし、顔はお岩さんのようだし全身を恐ろしいような蕁麻疹が覆っていました。何度か病院に駆け込んだものです。★この患者さんは、本当に全てのアレルギーを持っている人です。蕁麻疹も、アトピーの不発型と言ってもいいアレルギーであり、治すのは、アトピーよりもはるかに簡単です。しかしここでも、長期に渡ってセレスタミンというステロイドを服用させられてきた、蕁麻疹の患者さんが沢山います。このステロイドの影響を抜くのに、患者さんも私も、大変苦しむ事があります。ちなみに、セレスタミンは、ステロイドと抗ヒスタミン剤の合剤で、医者が患者に内容を言う時は、ステロイドと言わないで、抗ヒスタミン剤とか、痒み止めと言って、ごまかします。気をつけて下さい。たとえ蕁麻疹が起こっても、のどの粘膜が腫れて息がしにくい事がない限りは、それほど心配する事はありません。特に、乳幼児の蕁麻疹による喉頭浮腫（のどの奥の腫れ）には、注意してください。★

息子は今年（2002年）の春中学生になり、バトミントン部に入りました。よく食べ、よく遊び、よく運動し、とても元気にさせて頂いています。あと一つ「よく学び」を付け加えてほしい、私はなんとも欲張りな母になりました。

（7）私の第3の人生

ついに、その日が来ました。2001年11月27日にして頂いた血液検査の値が、全て正常値になったのです。「やった！あのリウマチが治った！」と大声で叫んで駆け出したい衝動に駆られました。★受診されて約10ヶ月で、血液データは正常に入ったのです。勿論痛みは、半年以内でほとんど消えてしまい、アトピーも2ヶ月間程続いた後のことです。まさに私の理論を証明するためにリウマチになってもらった方です。このように、急速に治療効果が出たのは、やはり何よりも、12年間のリウマチ闘病中に、絶対にステロイドを使わない決意を貫かれたからです。数多くの患者さんの治療経過を診てきた私の印象では、ステロイドさえ使わなければ、例え罹病期間が長くても、1年以内には、普通の生活が出来るようです。その中でステロイド注射を一本でも打ってこられた人は、まずクラススイッチがし難いので、アトピーになりにくい上に、なった後でも、自然後天的免疫寛容も起こり難いのです。この意味でこそ、絶対にステロイド注射は許してはいけません。にもかかわらず、整形外科医のステロイド注射好きは、非難しても非難し過ぎることはないのです。今医療界で、何の説明もせずに、もっとも安易にステロイド注射をポンポンやっているのは、整形外科医です。耳鼻科医よりも、はるかに大量に頻回にステロイド注射を、有無を言わずやりまくっているのは、整形外科医ですから、必ず注射の前に、中身を聞いて下さい。中には、嘘をつく整形外科医もいますから、その時は、どうにもなりません。やはり嘘をつけば罰せられるという法律を作るべきです。★それをやっとの思いで押しとどめ、代わりに電話をかけまくりました。主人には、余程のことでない限りかけない職場にかけました。これは、余程の事だったので。両親はじめ、いつも心配してくれていた友人・知人、そして松本先生を教えてくれたHさんに、心からの感謝を言わせて頂きました。

その夜、お祝いをすることにしました。あいにく電話が通じなくて何も知らなかった主人は、キョトンとしています。家族そろって乾杯をし、お寿司をほおばりました。この日が、私の第3の人生の始まりです。言うまでもなく、それは松本先生のお陰であり、松本先生から頂いたものです。★今私は、数多くの20代の未婚の女性のリウマチを、どんどん完治しつつあります。私は、リウマチを完治するのも、アトピーを完治するのも、医者の仕事として当然と考えていますから、特に、大きな感興を感じません。しかしながら、これからの人生を築いていかなければならない、若い女性のリウマチが良くなっていくのを見る時に、本当に大きな喜びを感じます。その時こそ、若い女性に、人生を取り返してあげていると感じることがあります。現在の日本に、100万人近くのリウマチ患者がいると言われてはいますが、その中の多くが20代前後の若い女性です。とりわけ私のこのホームページとその人達との出会いが、出来る限り早く実現されるのを祈るばかりです。それでも第三の人生をもらったと思ってもらえるのも、医者冥利につきるというものです。本当は、本を書いて、私の医院を知らせてあげればいいのですが、知られば、私は、早死にしてしまうでしょう。一人の医者が、毎日1万人を診る事は、可能でしょうか？★

しばらくの間、私は興奮状態の中でぼーっとなっておりました。いわば、真っ暗闇から急にお日様の眩しい所に出たような感じで、少なからず戸惑いを感じていま

した。発病以来、痛い痛いとしみながらの寝たきり生活になるという恐怖と絶望の中で、少しでもその時が来るのを遅らせた、それだけを考えてきました。それが突然、もう大丈夫だよ、何でも出来るよと言われ、「どうしよう、何をすればいいのだろう。」と戸惑ってしまったのです。喜びでも悲しみ・怒りでもそれがあまりに大きすぎると、心か脳の防御装置のようなものが働くのか、感覚（感情）が麻痺してしまうのではないかと思います。大切な肉親を亡くした時などあまりの悲しみには、涙さえ出ないで放心状態になると聞きますが、私の喜びの場合も、それに似かよったところがありました。

とりあえず、アトピーがおさまった後の秋から習い始めていたパソコンを、続けてやってみることにしました。そうだ、この喜びの手記を、ワープロでなくパソコンで書こうと目標を定め、取り組み始めました。パソコンを勉強しようと思ったのには、もう一つわけがあります。松本先生（「松本医院」のホームページ）に引き合わせてくれたインターネットを、使いこなせる様になりたいと思いました。松本先生は言うまでも無くホームページを開いてくれた主人と、インターネットそのものにも、どれ程感謝していいかわからないとの気持ちがあったからです。★インターネットには、あふれるばかりの膨大な情報が載せられています。例えば、アトピーとリウマチだけでも、様々な治療法がみられますが、どれを信頼していいかどうかを、患者である素人は分かるはずありません。私に言わせれば、インターネットに出ている、リウマチを含めたアレルギー情報で、唯一信頼できるのは、松本医院のホームページだけです。他の情報は、載せる価値もありません。しかし、誰がそんなことを知ることが出来るのでしょうか？立場を変えて、情報発信について考えてみたいと思います。何故、情報発信するのでしょうか？当然、発信する側に、何らかの利益がもたらされるからです。自分が得にならないことをやる人は、誰もいません。人間の遺伝子は、あくまでも利己的な遺伝子なのです。従って、間違った情報を流して、他人からお金をせしめれば、2倍返しをするという法律を、国家が作れば、これで素人は騙されることはないのです。この法律が作られない限り、何時までも、大衆は騙され続けるでしょう。残念です。私のホームページにしても、嘘偽りだと考える人は、来る必要は無いのです。手記を書いてもらっているのは、言い換えれば、私の理論と実践が、嘘偽りでない事を証明するためです。それでも信じない人がいるとすれば、やはり、嘘をついてお金を儲ければ2倍返しをしなければならぬという法律が無いからでしょうか？★

冒頭にも書きましたが、主人と車で8時間近くかけて、軽井沢へハーフムーン旅行（ハネムーンではないシフルムーンにはまだ早いので、ハーフムーンと名付けました。）に行きました。タイミングよく豪華ホテルのチケットを頂いたからですが、本当に素晴らしい記念すべき旅行になりました。また今年（2002年）の2月に主人の姪の結婚式で着物を着たのをきっかけに、4月からは着物の着付けも習い始めています。自分の普段着の脱ぎ着でさえ苦痛のあった私が、着物を着ることができるようになり、今は、来年1月の娘の成人式に振袖をこの私の手で着せてやろうとしています。以前からかかわっていたボランティア活動においても、とても楽しく充実した時間を過ごすことが出来るようになりました。

でもこんなことは、喜びを木に例えるなら、ほんの枝葉に過ぎません。太い幹は自分の可能性であり、深い根は感謝です。何かをしたいと思っても出来なかったし、やろうという意欲さえ失われていた私が、今は自分がその気になって努力をすればたいていのことが出来るでしょう。★この文章を読んだ人なら、どんな人も、この文章を書いた人が、いかに才能あふれ、聡明過ぎるといってもいい人だということが、お分かりになるでしょう。彼女の喜びは、単にリウマチが治ったというよりも、むしろ自分の才能を、死ぬまで思うままに発揮できるという自己実現の手段を、自分の掌に取り戻した点にあります。私自身も、若い頃に、20年間もの偏頭痛といわば嗜眠病（しみんびょう）で苦しみ、自己実現が不可能であった時代がありました。この方の喜びは、私がこの時代の苦しみを、乗り越えた時に感じた喜びと、同じものだと思います。現在は、世界で一人、リウマチ含めた全てのアレルギーを治せる医者となった事を、誇りに思っています。★そういった自分の可能性、それが松本先生から頂いた私の第3の人生だと言えます。再び開いて頂いた・与えて頂いた私の第3の人生のキャンバスには、まだ何も描かれていないのですが、その色は、爽やかなブルーかピンクがかかった淡いパープルです。そしてそのキャンバスの中に、とても元気で生き活きしている私があります。明るく豊かな将来が見えるのです。リウマチがじわじわ進行して日常生活にも支障が出てきた時、もしかして私の方が年老いたあの母に看病してもらうのではないか、苦勞を幾重にも刻み込んだ皺深いその手に更に苦勞を重ねさせるのかと思うと、断腸の思いでした。元気にして頂いた今、いずれ来るであろう、あの母が・父が倒れたとき、精一杯世話が出来、その幸せをどのように感謝していいのかわかりません。

これからは、ほんの少しでもいい人が喜んでくれること、ボランティア活動をさせて頂き、感謝という太い筆で、私の第3の人生のキャンバスを鮮やかに描いていきたいと、切に思っています。

(8) 松本先生へのお願い

失礼ながら、松本先生にお願いしたいことがあります。

① ノーベル賞を、もらって下さい。★人類の不治の病の一つであると言われていたリウマチを含めた全てのアレルギーを治す事で、患者の皆さんから、感謝の気持ちを頂く事が、私のノーベル賞です。いずれにしろ、ノーベル賞は、定説を覆し、新たな人類の福利を高める業績に対して与えられるとすれば、私は、与えられる資格はあるでしょうが、私が欲しくても、相手のあることですから、どうなるでしょう。ワハハハハハ・・・!!!!!!東京から来られた、とても頭のいい、現在完治に近い男性のリウマチ患者さんが、最近、面白い話をしてくれました。彼の手記も、今書いてもらっているところです。彼が、何故私の医院に来たのかを改めて聞きました。日本のリウマチ治療の最高権威である、東京女子医大のリウマチセンターや東京慈恵医大に行っても、「リウマチは治らない。治せる人がいたら、ノーベ

ル賞が確実にもらえるほどの、難治な病気である。」と言われたから、来たのだと伝えてくれました。東京女子医大と東京慈恵医大が、私をノーベル選考委員会に推薦してくれるでしょうか？★

科学的・医学的なことはわかりませんが、松本先生が世界で始めて打立てられた理論を世界でただ一人実践されている、それはノーベル賞以上の価値があると、私は確信しています。★リウマチを治してもらった患者さんにとっては、私の理論と実践（証拠）は、ノーベル賞以上のものです。何となれば、ノーベル賞は、リウマチを治す事が出来ないからです。その意味では、私は、毎日ノーベル賞以上のノーベル賞を、患者さんから頂いています。何れにしろ、ノーベル賞をもらおうがもらおまいが、私がリウマチを治せるという事実は、どんな人も絶対に覆す事が出来ない事実ですから、この真実よりも、重みのある、価値のある、真実は、どこを探せばいいのでしょうか？★

② 長生きして下さい。

リウマチを含めたアレルギーを完治出来るのは、世界中で松本先生お一人だと思います。にもかかわらず、アレルギーに悩む人は増え続けています。松本先生を必要としている人がいなくなるまで、絶対に倒れないで下さい。そして松本先生のこの理論を実践できる後継者・弟子（医者）を、たくさん育てて下さい。コペルニクスの地動説が今や誰も疑う余地が無くなったように、松本先生の革命的理論の実践である根本治療（完治できる正しい治療）が当たり前に行われるようになるまで、長生きして下さい。★実は、アトピーの完治の理論と実践を確立するまでに、非常に長い時間がかかりました。しかし、リウマチについては、リウマチがアトピーになって、最期はリウマチも根本的に完治するということが分かった後に、「革命的リウマチの根本的治療法」が出来上がったのです。それには、それ程時間はかかりませんでした。非常に対応困難なリウマチやアトピーの患者さんを前にして、他の医者が使ったステロイドのリバウンドをどのように対処するかについて、苦しんだ事があります。その時、確かに、自分の命が縮まるのではないかと、私のみならず、周りの人達も心配してくれた事があります。今では、治療経過の全てが分かっているので、どんな重症な患者さんも、ある程度まで予後が推測できますので、心労の余りに倒れるということは無くなりつつあります。しかし、毎日が、闘いの日々です。★

松本先生に診て頂くようになってしばらくした冬のある日、先生は風邪をひかれたようでした。右手では漢方煎剤が入っているであろう大きな湯のみを始終口に運ばれ、左手はティッシュでひっきりなしに鼻をかんでおられます。待合室では、私の前にも後にも溢れる患者さんがいて、先生はいつものように忙しく診察しておられました。私はとても心配になり、「先生、大丈夫ですか？私のリウマチを治して下さいまで、倒れないで下さい。」とお願いしたもので

す。「俺は風邪なんかひかん。大丈夫、あんたを治した次の日に倒れるわ。」
と言って下さった先生の声は少し鼻声で、冗談ではなく私は本気で余計心配になったのを覚えています。本音を言えばあの時、私のリウマチが治るまでに先生が倒れられると私が困るから、つまりは私のために心配していたのですが、今は違います。尊敬し、敬愛する松本先生、熱くて怖いけれど物凄くピュアで、とびきりのユーモア・並外れたウィットの中に茶目っ気や可愛らしさを垣間見せて下さる松本先生、世界でナンバーワンであり、世界でオンリーワンである松本先生ご自身のことを、心から心配しています。★世の中には、善人といわれる偽善者が多すぎます。私自身は、人間は他人のために生きる事が出来る相手は、本能的には家族だけだと思います。あとはギブ・アンド・テイクの世界だと思います。世の中に間違いが多いのは、テイク・アンド・テイクの人が、実は多いからです。言い換えると、世の中には、マザーテレサのような、ギブ・アンド・ギブの出来る人は、極めて極めて少ないということです。責任をとるということは、テイクした後、必ずギブすべきだということです。例えば、患者からお金を取るということは、その患者の病気を治すということです。残念ながら、現代の医療は、治すどころか病気を作っているわけですから、テイク・アンド・テイク・アンド・テイクであります。つまり、100%、無責任そのものです。私は、いうまでもなく、ギブ・アンド・ギブのマザーテレサの世界ではなく、テイク・アンド・ギブの完全な責任の世界で医療をしているものですから、私の言葉は、聞く人によっては、とても面白く、偽悪的に聞こえる事があるようです。このために、私は自分自身を「偽悪家」と呼んでいます。従って私は、誤解を受ける事が多いのですが、何れにしろ、私は医者である前に、真実を重んじる人間でありたいのです。★

③ 入院できる松本病院を、つくって下さい。

残念ながら、今なお麻薬であるステロイドが、大量に使われています。幸運にも松本先生にお出会い出来たものの、ステロイドから離脱しようとする方のリバウンドには、想像を絶するほどの恐ろしいものもあります。松本先生のご指導の元とはいえ、家庭において、ご本人の意思とご家族の協力だけで乗り越えるには、あまりに厳しいこともあるのではないかと思います。家族の協力を得られない方もあるでしょう。そんな方が、もっとも過酷な時期だけでも入院できる、松本病院があればどんなに心強いと思うのです。★世界的に見て、日本は、病院が多い事で有名です。従ってベッド数が多くなり、新たに病院を作ると、無理やりベッドの稼働率を増やすために医療費が上がるものですから、厚生省は、ほとんどの都市で、新規の病院の開院を認めていません。残念ですが。★

私の息子の場合も、私が原因で生活が成り立たなくなり、あの優しい主人が私から息子を引き離すようにして入院させました。西洋医学の病院だったため、入院したからといって完治するわけではありません。感染症で一度、アトピーで二度も入院しました。私や息子と同じようなことをさせざるを得ない人が、今もたくさんおられると思います。失礼を承知で、敢て勇気を出してお願い致します。★確かに、アトピーにしろ、リウマチにしろ、重症な人は、誰の助けも借りずに自

分ひとり、ステロイドの影響を完全に抜き去ってしまう事は、非常に困難です。家族の援助が無ければ、絶対に無理な症例は、無数にあります。その為に、途中で私の治療を断念する人も、何人も見てきました。一方で、朝から晩まで治療に専念できた患者さんは、とりわけリウマチがそうではありますが、私の治療を始めた頃は、乗り切れないと思った人でも、他人の力を借りて乗り切り、人生を取り戻した人を、あまた見てきました。確かに、リウマチやアトピーの罹病期間が長く、ステロイドをたっぷりほうりこまれてきた重症患者よりも、軽症の患者の方が、遥かに楽に仕事ができるので、私自身の負担が少ないのは、言うまでもありませんが。★

ここからは、私のファンタジーの世界です。★以下の素敵なファンタジーまで書いて頂いて、光栄の極みというものです。この患者さんは、リウマチが良くなった事を、本当に心から、偽り無く感じ入って頂いて、医者冥利に尽きる手記と言う以外に言葉がありません。リウマチは、100%、絶対に、治るんです。言うまでも無く、私の理論と治療法だけで。★

松本病院は、ヨーロッパの白いお城のような建物で小高い丘の上であり、緑に囲まれ色とりどりの草花が咲いています。そのお城の松本病院長は、チョビヒゲではなく立派な髭の王様で、ゆったりした院長室のソファに腰掛けられた姿は、相変わらずとてもダンディです。今現在の松本先生も、何時も大変オシャレでカッコイイのですが（ピンクのシャツ、縞模様のシャツに重ねたウエスタン風のベストなど、うちの主人とはかけ離れたステキなファッションが印象に残っています。奥様ではなく松本先生が選ばれるそうで、どれもよくお似合いです。）その上に王者の風格がついています。でもそのお人柄は全くお変わりなく、多くのスタッフ（医者）を従えて精力的に仕事をこなされています。

入院病棟の病室は、リゾート地にあるワンルームマンションのようです。漢方入浴剤治療をするためのバスが設置されており、トイレは勿論洋式です。全てユニバーサルデザイン、手すりも適切についています。入院患者用のベッドのほか、お世話をされている家族の方のためのベッドも備えてあります。子供病棟は、可愛らしくて保育園のようです。

そして広々とした庭の見える一廓に、「松本軍団」なる恐ろしげな名前の部屋があります。でも中からは、楽しそうな話し声が聞こえてきます。笑い声までしています。そうです、ここはFご兄弟を団長とする患者の会・松本軍団の部屋なのです。そこから「松本病院」のホームページが発信され、メールで自由に意見交換できる掲示板サイトも、大人気です。患者も元患者も気軽に出入りでき、そこで話をしたり話を聞いてもらおうと、不安や心配が和らぐと、とても好評です。その中に、あれっ、私もいます。松本先生に元気にして頂いた元患者の一人として、治療中の患者さんや今なおアレルギーで苦しんでおられる方々のために、出来ることがあるならどんなことでもさせて頂きたいと、張り切ってやっています。

最後に

2002年9月3日にして頂いた血液検査では、

血沈	19	(正常値12以下)
CRP	0.1	(正常値0,6以下)
ZTT	8.6	(正常値12以下)
RF	38	(正常値15未満)でした。

血沈とRFが正常値を上まわっていますが、体調は、全て正常値だった時と何ら変わりはありません。むしろ体調がいいので色々とやり始め手を延ばし過ぎて、その疲れが数値を悪くしているのではと思っています。

今年の夏(2002年8月)、今まで家に閉じこもってばかりいたこの私が、二十数年ぶりに高校と大学のゼミの、ふたつもの同窓会に笑顔で参加しました。大学のゼミの同窓会では、それぞれの近況を話し合った時、私は自分がリウマチであったこと・それと息子のアトピーで十数年苦しんできたこと・すごい先生のお陰で元気にならせて頂いたことを打ち明けました。二十数年ぶりにお目にかかった、少しもお変わりなくお元気でいらっしゃったゼミの先生も、懐かしい旧友たちも皆、とても喜んでくれました。家に帰ってから、私の中の奥深い所から込み上げてくるものがありました。

初診日に待合室で手記を読ませて頂きながら、自分もきっと元気になって手記を書くんだと思っていた私が、本当に、こうして手記を書かせて頂けるようになりました。松本先生には、何と感謝を申し上げてよいのかわかりません。松本先生、心より有難うございます。また手記を書かせて頂いている過程において、松本先生の凄さを再認識すると同時に、自分自身の心をじっくり見つめるよい機会となりました。それは時につらい作業でしたが、色々と多くの発見・気づきもあり、総じては楽しいものでした。松本先生、本当に有難うございます。月並みで在り来りの言葉ですが、これしかありません。

手記を書き終えるにあたって、松本先生、織田先生、看護婦さん、受付の方々、ホームページに携わっておられるスタッフの方々、皆様に改めて心より感謝申し上げます。有難うございました。★最期に私も一言、治せない病気を治してあげれば、どんな医者もこれ程素晴らしい賛辞の手記を書いてもらえるんです。今私は、やっとなんかに対して、本格的な勉強をやり始めています。リウマチやアトピーの治療も、

癌の治療も、結局は、免疫をどのように理解し、意味付けるかであります。私の持論である「リウマチの人は癌になりにくい」のは、当然の事であります。何故かという問いに対して、完璧な答えが見つければ、癌の根絶に大きな突破口を開く事になると考え始めています。癌を治して、これ以上素晴らしい手記を書いてもらう日が来る事を楽しみにして、勉強を続けていこうと思います。★

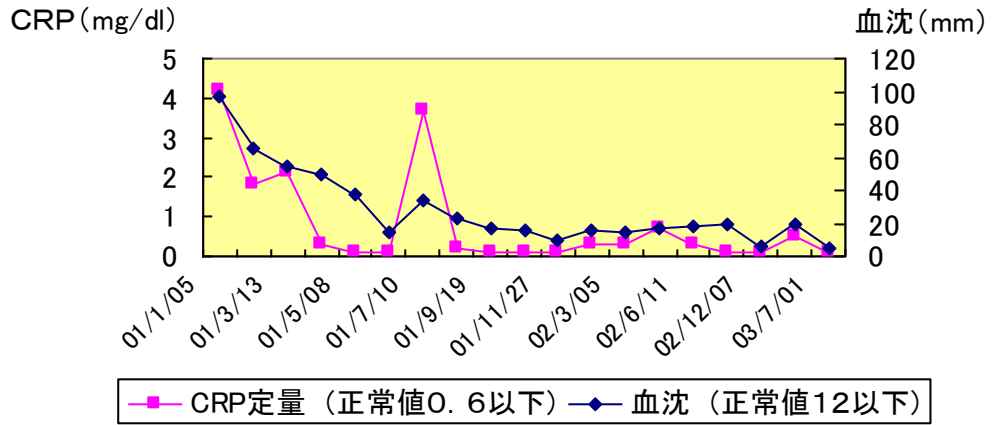
追記

2002年10月1日、私は午前の診察の折に、松本先生にこの手記を手渡ししました。その夜の7時頃電話が鳴り、ナンバーディスプレイを見た主人が「松本医院からやで。」と私を呼びます。ホームページに関するある事で松本先生のご承諾を得ていましたので、そのスタッフの方からかと思いました。ところが、松本先生ご本人だったのです。びっくりする間もなく、先生はもう私の手記を読んで下さっていて、一つだけ気になることがあったからと言われます。そして「アトピーだった息子さんのことで、そんなに自分を責める必要はない。責められるべきは、他にある。そんな事で折角のあなたの第三の人生に、暗い影をつくることはない。」という意味のことを、静かに言って下さいました。私は電話口で、臆面もなく泣いておりました。松本先生にお出会いしてからハッピーそのものだった私に、ただひとつ、よりつらくなったのは、重症のアトピーだった幼い頃の息子への思いでした。私のその、より深くなった心の傷に、松本先生が暖かい手をさしのべて下さったのです。初診日、大きくはない華奢な手から私の手に感じた、松本先生のやさしさを、私は今、心で感じています。★この方は、ご自分の子供さんがアトピーで酷かった時に、十分な介護が出来なかった事を恥じていらっしゃったわけですが、何も母親がアトピーの治療をやる必要は無いのです。それこそ専門家であり、かつ国家が認める医師免許を持った医者がやるべきものであり、いかなる状況でも、最期まで責任を持ち指導すべきは、医者であるわけです。治療経過中に、アトピーの状態が悪かったり治らなかつたりしても、責任を持つべきは、母親ではなく医者なのですから、母親がおろおろしても非難するに値しません。非難すべきは、治せない医者なのです。私は、何も暖かい手をさしのべたつもりは全くありません。ただ、テイク・アンド・ギブの世界を完結するために、事実を伝えただけなのです。★

松本先生（ドクター・マツモト）ではなく、ひとりのものすごくステキな人間である、松本仁幸氏に、心より有難うございます。

2002年10月2日

CRPと血沈の推移



RFとZTTの推移

